# サマーグリーンの夏

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サマーグリーンの夏

【Ｎコード】
Ｎ３０７６Ｗ

【作者名】
薄桜

【あらすじ】
閉塞感を抱えた僕は、色彩職豊かな惑星『サマーグリーン』へと旅立つのだった。
「空想科学祭２０１１」（ＲＥＤ部門　中編）参加作品です。

## スコラティクス・プラネタ

惑星コードＢＴ－０００５。通称スコラティクス・プラネタの、ワーカーエリア。
その一角にある製薬会社『メディン・メディカ』の医薬品部門の研究室の一室で、僕は幾度とも知れぬ溜息を吐いた。
モルモットの反応は良くない。動きは徐々に弱々しくなり、毛の下の肌は赤味が増した。顕微鏡で拡大した血液中のウイルスは、死滅どころか動きを弱める気配も無い。
……また駄目か。
一体いつなったら、この薬は完成するのだろう？
結果を待つ緊張が解けて、集中力が落ちるとドッと疲れが襲ってくる。
僕はこの瞬間が好きではない。自然と眉間を押さえると、再び溜息が漏れた。
無性に頭を掻き毟りたい気分だが、僕と同様の思いを抱く仲間に囲まれた中で、さすがにそこまでやるのは思い止まった。

既に決まりきっていた事だったが、この製薬会社に入社する事になり、研修の後すぐに今のチームに配属された。
ＢＴ－０００９で発見された、ウイルス性の発熱症に対抗する薬を開発するのが目的の、半分政府の管轄下にあるチームだ。
問題の感染症というのは、感染しても実は発症率自体は低い。
しかし一度発症してしまうと皮膚の色が赤く変色して微熱が続く。
後は半年ほどの間に徐々に内臓機能が損傷し、例外なく死を迎える。
だが、この恐ろしいウイルスには、稀に抗体を持つ者がいる事が２０年ほど前に発見されて公表された。
そして、風邪をこじらせた際の血液検査で、驚くべき事にその一人

である事が判明した僕は、その時点で将来が決まった。
当時7歳だった僕は、そこから特別カリキュラムの施設に転入させられ、今の研究のための勉強を詰め込まれる事になったのだ。

当時の僕は、驚きはしたものの、そう嫌な事だとは思っていなかった。
理由としては、これまで通り家から通える事と、特別である事が何となく誇らしかったからだ。
元々勉強は嫌いではなかったし……いや、おそらくこの星に住む者は大抵そうだろう。そもそも学者が多く入植し、産業といえば研究開発がメインの星だ。家庭の中で親が妙な研究に没頭している事も珍しくない。その姿を見て育った子も自然とそちらに興味が湧き、似たような道を進む。
こうしてこの星『メディン・メディカ』は、今日も様々な研究に明け暮れているのだ。

抗体があるのだから、それを培養し増殖させて接種すればいいようなものだが、残念ながらそう簡単には行かない。
それだけの話であれば、僕がわざわざ特別カリキュラムの施設に送られる事など無く、抗体が見つかってから２０年、いまだに不治の病であるはずが無い。
抗体の培養までは何でもないが、その抗体を感染者に投与した途端に体内の防衛機能に破壊されてしまい、まったく効果が無いのだ。

だから政府は、新たな感染の心配が無い抗体保持者を集めた。僕のように幼い者であればそのための教育を施し、この特効薬開発チームに送り込むのだ。
ちなみに、発症率の低い病に対し、これほどまでに政府が躍起になっているのは、ある高官の意地であるらしい。

家族の一人をこの病で亡くし、崇高な使命としてこのチームを立ち上げた。
……という事を、ここに配属されてすぐに聞かされた。
一瞬絶望しかけた２１歳だった僕の心情は、今は問題ではない。それでも人の役に立つのならばと、その時は乗り越えた。

しかし、あれから5年が過ぎて、成果の上がらない代わり映えのしない日々は、徐々に心を蝕んでいく。

今日も成果の上がらない一日の仕事を終えて、帰宅のために街を歩くと、大きく派手な旅行会社の広告が目についた。
澄み渡った青い空、眩しいほどに白い雲、透明感のある碧の海に、色鮮やかな緑の木々、そして、強い個性を主張するかのような色合いの無数の花々。
色の少ない研究室で過ごす身には、夢のような世界に思えた。
家に帰ってもこんなに色鮮やかな物など無い。せいぜい地球の青い海を映す、ホログラフを投影するくらいで、基本的にはモノトーンで支配されている。
繰り返し繰り返し、何度も流れる光の映像から目が放せずに、ぼんやりと眺めていると、次第に刷り込まれていくような心地がしてきた。
『幻の地球を体験。水と緑の楽園サマーグリーン。煩わしい日々を忘れ、雄大な自然に抱かれた休日を過ごしてみませんか？』

「それもいいかもしれない。」
結局僕は、広告に向かってそうこぼしていた。

## スコラティクス・プラネタ（後書き）

間に合え～（＾＾；

# 旅程

今僕は、サマーグリーンのゲートへ降りるためのトルネードカプセルの中にいる。
自己紹介が遅れたが、僕の名はフレッド・デュリス。２６歳の製薬会社に勤めるしがないただの会社員である。
日々蓄積した疲労を抱えた僕は、まんまと広告に染められて、迷う事無く夏のバカンスにこの地を選んだ。
……とは言え、実はこれまでまともにバカンス休暇など取った事は無い。
これまで別段行きたい所も無かったし、時々あるカレンダーの数日まとまった休みに、のんびりと過ごせれば十分だと思っていた。
そんな僕に対し、はっきり暗いと行ってくる人や、不思議がる人、場合によっては楽しむという事について懇々と説いてくるお節介な人もいたが。今回の件に関しては、今までの僕の生き方が功を奏したと思う。
惑星間の渡航は値が張るとは聞いていたが、旅行会社で提示された金額には思わず目を見張った。しかも今はオンシーズンで、数段下のオフシーズンの額との差に笑いたくなった。
しかし、これまでの使い道の無い生活が幸いし、別段費用に困る事は無いという結果になったのだ。
おまけに、総務に休暇を申請すると、あっさりと受理された。
「デュリスさんは残業が多いですね、おまけに今まであまり休暇を取っていませんね、労働基準局が目を光らせているので、是非ともお願いします。」
と、事務的な口調の女史にそう逆にお願いされ、過剰な休暇が与えられる始末だった。
過労働にうるさい昨今、残業が多いと会社のマイナスイメージを植え付ける事になるらしい事は理解したのだが、僕の存在価値に関し

て複雑な思いを改めて抱いた。
……ともあれ、そのおかげで今回の旅が実行出来た訳である。

今まで生まれ育ったスコラティクス・プラネタから出た事の無い僕は、今日初めてトルネードカプセルに乗った。
トルネードカプセルとは、地球時代の終わりの辺りに開発された大気圏を抜けるための技術であると共に、その乗り物自体の名称でもある。
地上のゲートと呼ばれる施設と、宇宙空間に浮くスペースターミナルとを繋ぐ唯一の手段であり、人の暮らす全ての惑星で利用されている。
スペースターミナルからは、惑星間を航行する定期船に乗り換えた。
ちなみにサマーグリーンまでは、ワープを利用しても三日かかる。
その三日間はB級チケットの簡素なシングルの船室が自分の部屋となる。
他にA級、S級といったお金持ち用のチケットがあり、部屋のランクがアップする。しかし僕は、そこまでの贅沢をする気は無く、またD級というリーズナブルな物もあるが、相部屋は遠慮した。
もちろん退屈な旅にならないよう、船内に娯楽施設は充実しているが、賑やかな酒場もカジノも僕の性分には合わない。旅に出た所で結局静かな場所が良いのは変わらない。
展望室で宇宙を眺めたり、部屋に据えられた端末を利用して遥か昔の映画を鑑賞して過ごしたのだった。

三日後、サマーグリーンの軌道を巡るスペースターミナルに到着し、トルネードカプセルの搭乗時刻までの空き時間に、展望室から窓の外の実物の惑星を目にして驚いた。
映像で見るものとは、まるで迫力が違うという事もあるが、少しくすんだ青色をしたスコラティクス・プラネタよりも、遥かに美しい

と感じた。広告で謳う『幻の地球を体験』という言葉は誇張では無さそうだ。
明るく鮮やかな青い星は、確かに資料映像で見る地球の姿に似ている。
そういえば、大きさも似たようなもので、おまけに自転にかかる時間も変わらない一日が２４時間という奇跡の星だ。発見された時は大騒ぎになったという。
水どころか、そのままでも生きていけそうな大気があり、地上は緑の木々に覆われていた。これなら生命体がいるのではないかと期待されていたが、微生物以上のものは発見には至らず残念だ……という旨の古い記事を、小さい頃に読んだ覚えがある。
しかし、これほど地球によく似た星にも、もちろん違う所というものはある。
気温だ。陸地の多くの部分が熱帯、亜熱帯に属しており、暑いのだ。
しかしサマーグリーンの人々はたくましく、それを逆手に取って、南国のリゾート地として売り出している。
そして僕は、今回見事それに引っかかった訳である。

大気圏を過ぎた後、カプセル中央に据えられたモニターは外部の美しい青と白を映し出した。やがて画面は真っ白になり雲を突き抜けると再び青に支配される。
青い海に浮かぶいくつかの陸地が、徐々に大きさを増して行く、隣で新聞に目を通す人は見向きもしていない映像を、僕は凝視していた。
……おそらく間抜けな顔で。

カプセルがゲートに降り立ち、案内表示に従って建物の表側に出て来ると、壁面に豊かな自然の映像がホログラフで投影されていて、美しいながらもそれは目に眩しく感じた。

通路沿いにいくつも並ぶ土産物売り場では、それぞれにカラフルで涼しげな衣装の店の人が、瓶詰めの果物や花、何かたくさんの箱を並べた前で、呼び込みの声を上げていた。
これが色の氾濫と言うべき様相なのだろう。
驚きつつも、予想に違わぬ場所だと思い、僕は嬉しくなった。
南の国の人々は元気で、活気に満ち溢れ、些細な事では悩みもせずに、僕の憂鬱まで一緒に吹き飛ばしてくれるパワーがあるんじゃないかと、勝手に期待をしているせいだ。
その希望が叶えられそうで、胸が弾む。
しかし僕は今、ただそこを通り過ぎるに止めた。
到着直後に土産物を買っても仕方が無い。

この後はクリアチューブで空港に移動する。
クリアチューブとは透明なパイプの中に敷かれた鉄道網であり、地上での一般的な交通機関の名称である。
ちなみに、テラフォーミング、トルネードカプセル、クリアチューブ、それから太陽光発電施設のブラックリボンが、惑星開発の基本的なセットであり、どの惑星でも利用されている共通の技術である。
もちろんスコラティクス・プラネタでも利用されているものだ。
そして、空港からはセスナ機に乗り、赤道から程近い南半球側にあるイースト・ヘブンという島に渡る。
その島と、すぐ隣のウエスト・ヘブンがリゾート観光の中心地で、どちらもお互い負けまいと、サービスを競い合っているらしいが、別にどちらでも良かった僕は、古典的ながら地図の上でペンを倒して決めさせてもらった。
実はこの星の売りはもう1つあり、北半球の緯度の高い位置に温泉がある。
そこは温暖で過ごしやすい地域だという事なのだが……しかし、老人の湯治客ばかりと聞き、あっさりと選択肢から除外したのだ。

## サマーグリーン

セスナ機でイースト・ヘブンに到着し、空港から一歩出て思わず顔を顰(しか)めた。
快適な空調に慣らされた体は、いきなりの気温と湿度の変化に、とてもじゃないが対応出来なかった。熱帯の空気はムワっと暑い。、一瞬眩暈がしそうで足を止めると、後ろから来た人にぶつかられてつんのめった。
ジロリと振り返る人に謝って、慌てて端に寄ってしゃがみ込む。
……これは想像以上に暑い。
スコラティクス・プラネタでは夏でもここまで暑くなる事など無い。そもそもあの星は雲が多めで気温が低い。初めて経験する温度に早々にダウンしそうだ
建物の影でこの暑さかと到着早々後悔しかけ、いやいや、まだ体が慣れてないだけで、慣れれば何とかなるはずだと、考えを無理やり切り替えた。そうでなければ、何をしにここまで来たのか分からない。
そう気合を入れて立ち上がり、タクシー乗り場の列に並んだ。

陽気な音楽をガンガン流す、窓全開の黄色い車を降りると、暫く世話になるヴィラのフロントの入り口前だった。
少々ふくよかな浅黒い男性運転手も、音楽以上の陽気さで、僕はどっと疲れていた。まさか信号待ちに、ハンカチを使った手品まで見せられるとは思わなかった……一体ここの人間はどれだけ陽気なんだ??
疲労と暑さでクラクラする頭を振って、フロントに続く扉を開ける……までもなく、そこからも音楽が零れている。
気を取り直して扉を開けると、色とりどりの花で埋まるカウンターの向こうに、やはり浅黒い顔に笑みを浮かべたふくよかな女性が、

デンと構えていた。
「いらっしゃい、予約のお客さんかい？」
「あぁ、はい。フレッド・デュリスです。３０日間予約してる、」
「はいはい、バカンスのお客さんだね？　アタシはここの女将のミリアだよ。」
差し出されたチェックイン・システムに認証ブレスをかざし、シャンという鈴のような音を鳴らすと、
「じゃあ、部屋に案内するよ。」
と、そう表情を緩ませる女将の後について、ジャングルの中ような道を歩いた。

このヴィラは、１棟１棟離れて建てられたコテージである。
女将は海が見える辺りの１つのコテージのステップを軽快に上がり、自分の認証ブレスでドアを開けた。通常チェックイン・システムに登録した客の認証ブレスが鍵となるのだが、女将の認証ブレスはマスターキーであるらしい。
部屋に入ったすぐ脇には、先に宅配で送った２つの大きなカバンが、きちんと並べて置かれている。
暑い空気の篭った部屋の窓を、女将が順に開けていく。
部屋の中央には大きなベッドが置かれ、海を臨むテラスの傍にはアイボリーのカウチと複雑な模様の織り込まれたクッションが二つ並べて置かれている。カウチの前のテーブルには細長いクロスがかけられ、その上に生けられた花が鮮やかだ。
壁に寄せられた机には小さな三角錐の端末が載っており、肘掛のあるイスは座り心地が良さそうに見えた。奥には小さなキッチンと冷蔵庫があり、バスルームは広かった。
風で舞い上がる白く薄いカーテンを除けてテラスを覗くと、そこにも木製のテーブルセットが置かれている。
ナチュラルな色合いの、雰囲気のある調度の置かれた広い部屋。これがあの金額なのは謎の気がするのだが、ウエスト・ヘブンとの価

格競争の結果だろうか？
「ここは自然しか無いとこだけど、まぁ楽しんどくれ。」
全ての窓を開け終わった女将が、振り返って笑みを作る。僕はその声を聞きながら、外から吹き込んできた心地良い風が、部屋の中の温度と独特の臭いを追い払うのを感じていた。

少し休んでから、この島の散策を兼ねて水を買いに外に出た。
外はまだ暑いが空港を出た時ほどの衝撃は無かった。多少は体が慣れたのか、時間的なものなのか、はたまた場所の問題なのかは分からないが、倒れそうだとは思わなかった。
少し日が傾いてできた木の影を選んで道を歩き、島の内側に向かう細い道に入った。
店の場所は女将に聞いた。ざっくりした説明だったが、それでもどうにかなりそうな、何も無い踏み固められただけの白い道。道を外れなければ、目的地に着けそうな気がしている。
それよりも、左右の木々が珍しくて仕方が無い。海岸の傍の道は、そう珍しくもない南国の椰子が植えられていたのだが、今見えているのは知らない木ばかりだ。これがこの惑星の固有種、あるいは自然交配で生まれたものだろうか？
明日は是非ともこの植生の観察をしようと決めた。

やがて見えてきた地元の人が利用する小さな雑貨屋は、女将に教えてもらった通り、一人の老人が店の軒下に置かれた質素な作りのベンチに座り、ラジオを聴いていた。
流れているのは緩やかな女性の歌声で、憂いのある詩と声が、今日作られたばかりの僕の中のここのイメージとはそぐわず、失礼ながらも場違いな曲だなと思った。
「あの、こんにちは。」
声をかけると、ちらりと僕を見た店主は、

「珍しいお客だな？　それとも迷子か？」
と、薄く笑った。何となく失礼な事を訊かれたような気がする。
「いえ、水を買いに来た客です。ミリアさんに訊いて来ました。」
「なるほど、あんたはあそこに泊まる客という訳か。」
そう言うと、彼はよいしょと勢いをつけて立ち上がり、店の中に入った。その後姿にはどこか風格があり、無言の威圧感のようなものを感じる。年の功だろうか？
今は細いが、元はガッチリした体躯をしていたのではないかと、僕は勝手に想像した。
表が眩しいせいで、店内に入ると薄暗く感じる。ざっと店内を見て回り、扉の付いた冷蔵ケースから2リットルの水を二本抜いて、レジの前に座る店主の前に置いた。
「テープで良いか？　袋が良いか？」
「じゃぁテープで。」
そんな短いやり取りだけで、認証ブレスをかざして支払いを済まし、ボトルを抱えて外に出た。
しかし、ふと気になった事を訊いてみたくて足を止めた。
「何故ベンチでラジオを聴いていたんですか？」
「お前さん、妙な事を訊くな？　そこの方が風が通って涼しい、ラジオは退屈しのぎだ。こんな時間に客は来んからな。」
「そうなんですか？」
「暑い時間は涼しい場所で過ごすさ、もう少しすれば多少は客が来るだろう。」
訝しがりながらも答えてくれた店主の言葉は、なるほど理にかなっている。と、僕は納得して礼を言った。

## 異文化コミュニケーション

水を買った帰り道、汗を掻いたボトルを抱えた僕がフロントの前を通りがかると、女将に引き止められた。
女将はここの伝統的なダンスや音楽について熱心に語り、それを手軽に堪能できる場所だから是非に。と、ディナーショーで有名らしいレストランを薦めてきた。
「ここに来たんなら、一度は見ておいて損は無いよ？」
いずれにしろ、他に当ても無かった僕は、その言葉に乗せられて夕日が暮れていく浜を店に向かって歩いた。
ちなみに、濡れた服については「そんなものはすぐに乾くさ」と、笑いながら肩の辺りを叩かれた。

店の場所については迷いようが無い。既に建物は既に見えている。徐々に暗くなり、若干見えにくくはなってきたものの、砂浜に出て左を向けば、１５０メートルくらい先だろうか？　砂浜から一段高くなった場所に、黒っぽい建物があるのが見える。
そして、その入り口の前に篝火のものらしい揺れる炎が二つ見える。今時篝火だなんて、随分と雰囲気重視の店のようだ。ライトがあるのに、わざわざ危険な火を焚く必要は無い。
そして、監視者も立てずに屋外で火を焚き続けている事にも驚く。もしスコラティクス・プラネタで、外で許可無く焚き火でもしようものなら、消防から委託の監視員が取り締まりにやってくる。
過去、ある科学者が野外で派手な燃焼実験をしでかして、周囲を延焼、その上有毒ガスまで発生させた事例があり、そこから規制が厳しくなった。あの星には、他にも屋外での規制がかなり存在する。
その原因は大抵が個人的な実験の失敗に因るものだ。
そんな事を考えながら、砂に足を捕られながらも店に向かって歩い

ている途中、走る一人の少女に追い抜かれた。
波の音しか聞こえなかった事と、薄暗く僅かの時間の事でもあり、はっきり顔までは見えなかったが、あどけなさの残る若い女の子だったのは間違いない。後ろ姿からはそう見える。
白地に青い大きな花の描かれたワンピースに、後ろで纏めた長い髪を跳ねさせて、すらりと伸びた手足を懸命に動かしている。僕は驚くと共に思わず目を奪われて、少し強めの花のような残り香の中、彼女の後姿を眺めた。
すると彼女は、これから向かう店の裏手に回って見えなくなった。

派手な花が盛り立てられたテーブルに並ぶ料理を前に、正直僕は眉間に寄る皺を隠せそうに無い。もっとしっかり、料理についても調べておくべきだった。
判らないなりに、とりあえずウェイターのお勧め料理を尋ねて頼んでみたのだが、ここの人達のお勧めは、僕にとってはとても過酷だった。強めの香辛料ばかりというのは、かなりきつい。
あまりに辛くて急いで手を伸ばしたドリンクは、逆に甘過ぎて頭が痛くなりそうになった。この食文化の差はあまりにも大きい。

花のエッセンスが混ざった水を片手に、この先の残された日数について頭を悩ませていると、急に辺りが暗くなり威勢のいい掛け声と太鼓の音が響き始めた。
女将の言っていたショーが始まったのだろう。
前方に設けられたステージで半裸の男たちが、独特の声を上げて腰に付けた太鼓を叩く。そのリズムの中を、鈴や飾りを身に付けた、露出の高い赤い衣装に身を包んだ女性が一人、中央で激しく踊っていた。
しなやかに手足が動くたびにシャンシャンと鈴が鳴り、飾りが光る。彼女自身が、はっとするほどきれいな人だったが、それ以上に目に

惹かれた。力の強い自信にあふれた目をステージから投げかけ、次の瞬間その目は既に違う方を向いている。奔放で艶かしい踊りと相まって、僕は誘われているような気がして顔が赤くなるのを意識した。
しかし彼女が後ろを向いた時、見覚えがあるような気がして考え込んだ。

……あぁ、なるほど。さっき浜で見かけた少女と同じだ。
その事実に気付いて僕は相当に驚いた。今の踊る姿も、浜を走る姿も、どちらも力強くはあるが、先ほどのあどけない後姿からは、あの妖艶な踊りは想像もつかない。
女は変わる……過去のそう多くない経験を総合して、そう結論を下した僕は、たぶん遠慮の無い目で彼女を眺めた。

彼女の踊りの他に2曲のショーがあったが、その間にもう少しだけ料理にトライして敗北を喫したのだった。
空になったピッチャーの水のお代わりを求めて、偶然通りがかったウェイトレスを引き止めたのだが、その彼女を見て固まった。
先ほどあのステージで、激しく妖艶に踊っていた彼女だったのだ。
「あ……。」
『水を下さい』と、続くはずの言葉が出て来ずにいると、彼女にいきなり頬を叩かれた。
「なっ！？　何で？」
意味が解らず、彼女を見ると、
「私はあなたの目が嫌。」
はっきりとそう言って、あの力強い目を真正面から向けられた。誘惑でも挑発でもなく、軽蔑の目だ。あの位置から僕の不の感情を見透かされたとでも言うのだろうか？
僕は呆然として何も言えずにいると、年配の男性が寄ってきて色々と謝罪の言葉が投げかけられた。

「シャファン、またお前は……ほら、きちんと謝れ！」
オーナーらしき人物の言葉で、シャファンという少女は不承不承頭を下げたが、僕に向ける目は変わらなかった。
それがとても居心地が悪くて、僕は謝罪を断った。
「いえ、いいんです、すみません。たぶん僕が悪いんです。その子の事も叱らないでやって下さい。」
あのステージ上から、あれだけ激しく踊りながら、客をしっかり見ている事に驚きを越えて感心した。だが、僕があまり良い目で見ていなかったのは紛れも無い事実である。

僕は飲食代をタダにするという申し出を断って、代金を払って店を出た。
この一件で店内が慌しくなり、落ち着かないという事もあるが、正直料理をどうするかに困っていた僕には、ある意味千載一遇のチャンスでもあったのだ。
水でいっぱいになった腹を抱え、見知らぬ星空の下をコテージに向けて歩く。
絶対に帰ったら食べられる料理を探そう。そう心に誓って砂に捕られる足を懸命に動かした。
しかし……よくこんな所を走れたものだ。と、歩くのが精一杯の僕は、もう一度彼女に感心した。

コテージに戻るとすぐ端末を起動させた。もちろんこの星の食文化を調べるためだ。
認証画面でブレスをかざして自分のストレージにアクセスすると、未読メールがある事を知らせるマークが付いていた。
仕事関係のメールだと思い、目を通すため受信箱を開いてみると、２０通ほどのダイレクトメールで脱力した。しかも全ての差出人が『イーストヘブン観光事業部』となっている。このメールのタイト

ルからは、この島のエリアガイドや、お勧め情報であるらしい事が推測される。
これは、ホテルで利用されるチェックインシステムに連動させて……いるんだろうな、たぶん。
まったく、この星の人達は仕事熱心だな。と、呆れながらも更に感心させられた。

## 新しい友達

朝食はヴィラ内の食堂で食べる事が出来る。バイキング形式でパンケーキに、スクランブルエッグ、サラダと、見慣れないフルーツを皿に取り、ようやくまともな食事を口にする事が出来た。
昨夜調べてみた結果としては、別にこの島の料理が全部辛い訳ではなかった。相談した相手が悪かったという事になるのだろう。
好意的に取れば、彼が辛党であったのかもしれない。邪推すれば、からかわれたのかもしれない。
いずれにしても、もうあの店に足を運ぶ事は無いだろう。

朝食の後、再び雑貨屋に出かけた。持ち歩くのに適度な小さめの水のボトルと、携帯食を買うためだ。
「おはようございます。」
「おう、昨日のやつだな。今日は何の用だ？」
電子ペーパーの新聞から顔を上げた店主は、昨日同様にラジオの流れる軒下のベンチに腰掛けていた。
「水と食料を買いに。」
「水は蛇口を捻れば出るんだがな。まぁいい、入んな。」
そう微妙な笑みを浮かべる店主に促され、薄暗く感じる店内に入ると、昨日確認しておいた栄養機能食品の置いてある棚に向かった。
僕の暮らす街に比べれば数や種類は格段に少ないものの、お菓子に紛れて置かれているソフトクッキータイプの『セット・バランス７』の、フルーツ、ココア、チーズの味を２つずつ取った。と言っても、これだけしか種類は無いのだが。
それから、冷蔵ケースから５００ミリリットルのボトルを取り出して、レジに持って行くと、店主が呆れた顔を僕に向けた。
「これは美味いのか？」
商品のコードをスキャンした後、袋に入れる手を止めて『セット・

バランス7』のチーズ味をマジマジと眺めている。
「時々お前さんみたいな旅行者が買っていくから置いてるが、ここの者はまず買わんからな。」
「僕も美味しいとは思いませんが、とりあえずこれで栄養は取れるので便利ですよ。」
そう答えると、更に言いようのない表情を見せた。
「わしは、食事は美味い方が良いがな。」
店主がそう言いながら全てを袋に収めたので、僕は曖昧な笑みを浮かべて支払いを済まし、店を後にした。

コテージに戻った僕は、送っておいた大きなカバンの一つを開けた。もう一つには着替えや日用品を詰めていたが、こちらには調査に使う機材が詰めてある。
ハンディタイプの成分スキャナに、モバイル端末、カメラ、持ち出し持ち込みに抵触しない検査用の薬品など色々と持参した。もちろん別に社の命令という訳でもなく、完全に僕が勝手にやってる事だ。現状を打破する何かを見つけたい……それも今回の目的なのだ。
カーキ色のボディバックに水と食料とタオル、それから成分スキャナを入れてチャックを閉めて背負う。カメラはズボンのポケットに入れ、モバイル端末でこの島の地図を映すと、現在地に赤いマークが点る。これで迷う事は無い。

コテージのすぐ傍の、とりあえず手近な場所からジャングルに踏み込む。白く細い道を外れても、すぐさま進むのに困るような密林にはならない。
この星の植生は独特で、薬学を叩き込まれた人間としてはとても興味深い。
惑星コードＴＴ－０００７。最初から地球によく似たこの惑星は、青く広がる海を持ち、青く広がる空を持っていた。多くの惑星が何

も無い状態からテラフォーミングをされる中、この惑星だけは元から緑が豊富だった。
しかし、僅かに違う大気の組成をいじったテラフォーミングの影響で、環境が激変し元の植物はかなりの数が絶滅した。何とか生き残った種の中には毒性を持つものがあり、また後で持ち込まれた地球原産の植物と結びつき、新たな種が数多く生まれた。
明確な証拠は無いのだが、何らかの生命体がいたのではないかという話もある。
しかしテラフォーミングを行った企業は、その辺りの情報開示を一切しなかった。結局グレーな話はグレーのままで、だから『所詮はまだ人のいない惑星での出来事だ』という穿った見方をする人もいる。
しかし今のここは、リゾート観光の惑星であると声高に宣言し、実際にそれで名を馳せている。
いずれにせよ、僕にとってはどちらでもいい問題だ。興味があるのは植物で、失われた植物に多少の未練はあるが、新しい種も派生した。どちらが良いかなんて一概には言えない。それに２００年も昔の事を、あれこれ言った所でどうにもならない。

むせ返るような濃い緑の中に、淡い橙色のかぼちゃみたいな形をした小さな実がたくさんぶら下がっているのを見つけた。写真を撮った後、もっとよく調べてみようと、手を伸ばしかけた所で制止の声がかかった。
「それは食べない方がいいよ？」
変声期真っ只中のような不思議な声で、確かにそのくらいの時期の背格好をした少年が笑みを浮かべて僕の事を見ていた。
「外から来た人だよね？　食べたいなら食べてもいいけど、お腹壊すのは覚悟してよ？」
「いや、僕は別に食べる気はないけど。この星の植物に興味があるだけだよ。」

「何で？」
ガサガサと下生えの葉を揺らして傍に来た少年は、人懐っこそうな目で遠慮無く僕を見上げて首を傾げた。
長めの髪を後ろで束ねた、１４、５歳といった辺りだろうか。どことなく見覚えのある顔立ちをしているのが、妙に気になる。
「僕は薬を作る仕事をしてるんだけど、その材料になる物は無いかって調べに来たんだ。」
簡単な説明に、内心で「個人的にだけど」と付け加える。その部分を口にするのは、何となく抵抗があった。見栄という訳でもないが、言い訳がましい理由を説明する気も無い。
しかし、そんな事情を知らない少年は目を輝かせ、熱心な売込みをかけてきた。
「じゃぁ、俺をガイドに雇わない？　俺は植物に詳しいよ。あの実の成る木はね、この辺ではロウクワモドキって呼んでるんだ。実は甘いんだけどそのまま食べるとおなか壊すんだ。中には小さな種がいっぱいあって、汁はかぶれるよ。」
少年のその最後の言葉に冷やりとし、もぎ取る前に止めてくれた事に感謝した。
ここに来る前に、この星の植物のリストにざっと目を通しはしたものの、一目で判別出来るほど記憶はしていない。というか無理だろう。
確かに現地のガイドがいた方が、効率がいい。
「結構危ないのもあってね、かぶれるくらいじゃ済まない物もあるんだよ？　似たような形の果物だってちゃんと判別出来るし、ちょっと秘密の場所も知ってるんだ。」
少年は身を乗り出して、更に売り込んでくる。
「あのね、俺は将来植物学者になりたいんだ。だから本当に詳しいよ？」
「分かった。」
実際彼がどれほど頼りになるのかは分からないけれど、何も知らな

い僕より詳しく、頼りになるのは間違いない。それに、ここにいる間の良い友達になれそうな気がする。植物学者になりたいと言った彼の顔は本物で、僕はその彼の熱意を懐かしく感じた。将来は薬の開発をするんだと意気込んでいた頃の自分と、何となく重なるものがあったからだ。

「俺を雇って損は無いと思うよ……って、本当？」

「ああ、けど未成年を勝手に雇うわけにはいかないから、まずは親御さんの許可を貰っていいかな？」

「やった、おじさん話が判るね！」

無邪気に喜ぶ少年の一言に、僕は表情が固まる。

「……おじさんはまだ勘弁してくれないかな？　僕まだ２６なんだ。」

「そうなの？　もう少し上……ごめんなさい。じゃぁお兄さん？」

その窺う目が余計にショックだ。そんなに老けて見られるとは思ってもみなかった。

「僕はフレッド・デュリス、フレッドって呼んでくれないかな？」

「解った。俺はヤハク・レイル。ヤハクでいいよ。」

「よろしくヤハク。」

「うん、よろしくねフレッド。」

そして僕は、心に多大なダメージを負いつつも、ヤハクと笑顔で握手を交わした。

## 再会

易々とジャングルに分け入って行くヤハクの後ろを、僕は何とか必死に付いて行き、彼の家に辿り着いた時には疲労困憊の汗だくになっていた。これは確かに、年より上に見られても仕方が無いかもしれない。

元々体を動かす事に興味は無く、職場でも使うのは頭くらいで、運動なんて縁の無い人生を歩んできたツケが、これでもかとばかりに回ってきた感じだ。

へたり込んで荒くなった息を整えていると、不意に覚えのある声が耳にと飛び込んできた。

「ヤハク？　あんたまた手伝い放ってジャングルに行ってたの？……って、あなた何でここにいるの？」

顔を上げるとそこにはもちろん僕を引っ叩いてくれた少女が立っている。傾斜の大きな屋根が特徴の、窓を開け放した開放的な家を背景に、顔に浮かぶのは困惑だろうか。

「やあ、昨夜はどうも。」

僕はフレンドリーに手を上げたつもりだったのだが、赤い花の刺繍のある生成りのワンピースの彼女の機嫌は悪化した。

「何？　姉ちゃんこの人知ってんの？」

……なるほど。彼女が姉なら、見覚えがあって当然だな。

「えぇ、気に入らない人よ。」

姉の……確かシャファンという少女は、取り付く島も無いほどキッパリと言い放ってくれる。刺さるような視線が痛い。しかし、僕はここまで言われるような事をしたか？　僕としては叩かれた分イーブン、せめて割り引いてくれても良いのではないかと思うのだが。

「フレッドは今回の雇い主なんだ。」

「改めまして、僕はフレッド・デュリスです。」

気を利かせて紹介してくれたヤハクに一瞬目を向けて、僕は立ち上がって彼女に名乗った。
「……そう、弟がお世話になるみたいだから名乗っておくけど、私はシャファン・レイル。もう私をあんな目で見ないで頂戴。私にだってプライドがあるの。毎日毎日練習して踊ってるの。馬鹿にしたような目で見ないで。」
彼女が口にした、やや感情的で率直な言葉は、残念ながら僕には響かない。何故なら、僕はそんな事を考えてなどいないからだ。という事はひょっとして、叩かれ損なのか？
そう考えると思わず笑ってしまい、もう一度頬を叩かれた。
「姉ちゃん！？」
ヤハクの非難の声で逃げようとした彼女を、僕は捕まえて引き止めた。このまま逃げられたら本当に叩かれ損で、誤解をされたままというのは何となく悔しい。
「僕はそんな事考えて無かったよ。店に行く前に一度君を見かけて、なのにステージの上の君はまったく別人のようで、感心してたんだ。」
多少ニュアンスは違うが、あながち間違いではない。
「……あの目で？」
「そう、見事に変わるものだってね。凄かったよ。」
信用まではされていないが、表情は多少和らいだ……ようには見える。
彼女はバツが悪そうに僕の手を振り払うと、
「分かった。悪かったわよ！　……どうせなら、もう少し賞賛の目で見てよ。」
そう言い残して家の中に消えた。
「フレッド、やる時はやるんだね？」
完全にシャファンの姿が消えた後、ボソッとヤハクが呟いた。
「何が？」

「ううん、それより頬っぺた平気？」
思わず苦笑すると、熱を持った部分が引き攣ったような違和感がある。ちなみに、昨日よりも今日の方が痛い。
「まぁ、少し痛いかな。あ、ひょっとして手形ついてる？」
この質問に彼は、申し訳無さそうにしながらも首を縦に振った。

保冷剤を包んだ濡れたタオルを借りて頬を冷やし、少し落ち着いた所で彼らの母親に挨拶をした。サニエさんという名だそうだ。
頬の手形については、二人して何とか誤魔化した。冷やした事で色が薄くなってくれていて本当に助かった。
ヤハクをガイドに雇う事は、あっさりと承諾された。彼自身が『今回の』と漏らしたように、これまでに何度もこういう経験があるらしく「一日いくらで」という提示が向こうから為され、前金まで取られた。
……本当に、ここの人達は逞しい。
しかしながら、彼らの母親はビジネスライクな人という訳ではない。ありがたい事に昼食をご馳走になった。
もう昼が近かった事と、僕が取り出した『セット・バランス7』を見て、それなら一緒に食べましょうと誘われたのだ。

香草を乗せて蒸した鶏肉に、薄く焼いたパン、野菜のスープと、オーブンで焼いた魚。それにサラダと、フルーツを盛った器もあった。
今日の僕の食生活は充実している。
食事中に色々な話をしたのだが、最後には「いつでもご飯食べに来ていいからね」と、サニエさんに言われた。言葉や表情の端々から、どうにも同情されているような気がするのだが、そんなに僕は同情されるような生き方をしているのだろうか？
やや複雑な心境ながらも、僕は少し甘えさせてもらおうと思った。
食事の当てが出来るのは非常にありがたい。
しかし、もし甘え過ぎてしまったら、食事代も渡した方が良いのか

なとも考えた。
ちなみに、この食事中シャファンとは見事に目が合わなかった。同じテーブルを囲んでいるのだが、防御壁のような空気を纏う彼女には、こちらから触れる事が出来ず、そして、向こうからもこちらに接触する意思は無さそうで、理由を知るヤハクはあえてそこに触れようとはしない。
時折サニエさんだけ不思議そうにしていたが、さすがに理由を説明する気は無い。
微妙に複雑な緊張感に包まれた時間だったが、それでも人と食事をするのは楽しいと改めて感じた。

食後はヤハクの話すこの島の事を聞いた。
父親がホテルで働いている事。観光が主な産業だけに、時々観光客が面倒事を引き起こす事。内心それを良く思っていない者もいる事。
それでふと思い当たる、昨日の夕食の事を話してみると、
「うん、彼は時々そういういたずらをするらしいよ。」
と、思わぬ所で答えが得られた。
陽気で明るい南の島は、僕が勝手に思い描いていた幻想だったのかもしれない。人が暮らす世界である限り、そこには色々あって当然と言えば当然……という事か。

夕方、ヤハクと認証ブレスのデータを交換してコテージに戻った。
ヤハクは携帯を持っていないらしいが、これでメールでの連絡が可能になった訳だ。
帰りの道は、もちろん行きのようにジャングルを分け入ってでは無い。きちんとした道をヤハクに案内してもらったので、今後は一人でもあの家に行く事が出来る。

## 物思う昼下がり

ヤハクの都合次第だが、朝は彼の家を訪ねるのが日課になった。朝のうちにジャングルの散策をして、日が高くなると涼しい場所であれこれ話す。彼からこの星、この島の事を聞き、僕も知っている事、自分の住んでいる場所の事、そして自分自身の事を話した。後払いの日当で繋がっている間柄ではあるが、これまでの友人達よりも距離が近いような気がしている。成果の比較や成績評価のものさしが存在せず、何より彼が屈託なく笑うからだろう。1ダース分年の離れた友人は要領が良く、少々我が侭な所があるが、それが年相応の気がして微笑ましい。そして僕はそんな姿に憧れる。自由な彼を見ていると、僕の過ごしてきた時間が何とも歪に思えてくるのだ。

太陽が中天を過ぎた2時間後。そんな中途半端な時間に彼は「アイスが食べたい」と急に言い出した。昼食はありがたくもサニエさんにご馳走になり、家の裏手を少し入った所にある小さな湧き水に、足を浸してして涼んでいた時だ。

「まだ2時だね。おやつの時間には早いんじゃないか？」

「……そういう子ども扱いはしないで欲しいな。」

「未成年は立派な子供だよ？」

簡単に拗ねる彼が面白くて、ついそんな事を言ってしまうが、きっと彼は僕より大人だ。ここ数日だけで、僕には経験が足りない事を思い知らされた。成りは大人だが、経験の伴わない知識ばかりでは大人と言えないのではないかと、実は不安に思っている。しかし無論そんな事を話す気は無い。さすがにそのくらいの見栄は張りたい。

「はいはい、でもアイスって、家に帰るのかい？」

「いや、パウじいのとこに買いに行こう。」

「パウじい？」

「うん、島の雑貨屋。」
覚えのあるフレーズに、僕はある風景を思い浮かべる。
「いつも店の前のベンチでラジオ聞いてる？」
「そう。って、フレッド知ってるんだ？」
知ってるも何も、夕飯用の買出しに二日に一度は会っている。夕飯と言ってもレトルトや即席の味気無い物ばかりなのだが。おかげでレジで「少しはまともな食事をしたらどうだ？」と、毎回叱られる。
「他に店を知らないからね。」
これは正しくない。正確にはあの店が好きなのだ。フラッと寄れて、何となく話をして、そんな他愛の無いふれあいがとても楽しい。
「ふーん。まぁパウじいは、ツンケンしてる時もあるけどいい人だからね。きっとフレッドは口喧しく言われてるんじゃない？　飯ちゃんと食えとか。」
そしてヤハクは、なかなか鋭い。
「……正解。」
「やっぱり。」
彼に思いっきり笑われて、今度はこっちが拗ねる番だ。それにしても、息も絶え絶えになるほど笑う事は無いだろう？
「そんなに笑うな。ほら、行くなら行こう。」
僕は気を取り直して立ち上がり、水から上がると濡れた足でそのままサンダルを履いた。
確かにそのうち乾く。ボトルを抱えて服を濡らした時に女将に言われた言葉を、ヤハクと過ごす中できちんと正確に理解した。
『細かい事にこだわるな』結局はそういう事だろう。

小さな商店に置かれたベンチには、相変わらず店主であるパウじいが座り、ラジオが鳴っている。
今流れているのは賑やかなロックンロール。遥か昔に流行った定番の曲で、激しいリズムも叫ぶような歌声も、このゆったりと時間の

流れる長閑（のどか）な島の風景にはそぐわない。と、やっぱり僕はまだ感じるのだが、店主は一向に気にした様子も無い。いつものように定位置で、電子ペーパーの新聞を広げているだけだ。
「パウじい、アイス頂戴。」
「よぉ、ヤハク今日も元気だな。」
だが、違うのは店主の表情。彼はまるで孫を出迎えた祖父のように優しく笑い、僕は少しショックを受けた。僕は彼が笑う所を初めて見たのだ。
さっさと店内に飛び込んでヤハクが消えると、その後ろにいた僕は店主と自然に目が合った。
「お前さん、ヤハクに捕まったのかい？」
呆れつつも豪快に笑う姿に、僕も何となくつられて笑ってしまう。そして、その事に満足している自分は本当に子供だなと感じた。
「はい、ガイドに雇ってくれって捕まりました。」
「ちょ、二人とも人聞きの悪い事言うなよ。確かに客は客だけど、フレッドは友達だよ！？」
店の中から慌てて訂正する声に、思いがけず嬉しい言葉が聞けたと、僕は更に嬉しくなったが、店主は改めて僕を見て以外そうな顔をした。
「ほぅ、たいそうな入れ込みようじゃないか。お前さんフレッドって言うのかい、これまた随分と気に入られたもんだな。」
「……はぁ、フレッド・デュリスと言います。」
そういえば名乗りもしていなかった事に今更気付かされ、僕は改めて名乗った。
いつも『お前さん』と呼ばれ、僕も『店主』と頭の中で呼んでいたが、その事に何の疑問も抱いていなかった。人の多い街で、いちいち人の名前を気になどしていられないのが当たり前だと思っていたが、よくよく考えてみれば不自然で失礼な事なのかもしれない。
そう、今までの自分を省みていると、ヤハクはさらりと失礼な事を言ってくれた。

「フレッドは、大人の癖に頼りなくてさ、何かほっとけないんだよね。」
ちょっと待て、１４歳にそんな言われ方をされる僕って何だ？　確かに頼りない自覚はあるけど、ほっとけないって言われたのは初めてだ。
「なるほど、それなら分かった。」
ヤハクの言葉に微妙に傷ついた僕は、さらに追い討ちをかけられるように、パウじいにまで笑われた。そこまで僕は頼りないのか？
そんなに危なっかしいのか？
あまりのショックに言葉が出ず。結局ベンチに座って黙り込んでいると、店に入ったパウじいが一本のアイスを手にして戻ってきた。
「まぁ、これをやるから……そんなに落ち込むな。」
妙な気の使われ方をして、余計に情けない気分がする。
それでも、渡された青いシャーベットのアイスに噛り付いていると、不意に名を呼ばれた。
「フレッド。放っておけないってのも、お前さんの人徳だよ。」
くしゃりと笑うパウじいの言葉は、すんなりと染み込ませるには気恥ずかしくて、
「……それはどうも。」
としか返す事ができなかったのだが、完全に見透かされたように大笑いされた。
これが年の功か！？

## タマヒカリグサ

サニエさんの料理は美味しい。申し訳ないと思いつつも、ついつい彼女に甘えて、昼食を頂く事が増えている。
天井の高い、風通しの良い家の風景も見慣れ、昼間は居ない父親の席を借りる事にも慣れてしまった。
さすがにそろそろ遠慮した方が良いのだろうか？　と、迷う所なのだが、
「遠慮しないで。フレッドはもう、家族みたいな気がするのよね。」
などと、サニエさんに言われてしまうと、ついつい誘いに乗ってしまう。
ただシャファンの視線は相変わらず冷たく、一切遠慮の無い声で、
「あなた暇なの？」
そう、何度か問われた。
「確かにそうだね、たぶん僕は暇なんだよ。」
とその度に、僕は情けなくも手早く答える。
すると彼女は、いつもフンと鼻を鳴らして行ってしまうのだが、特に話も無いのに、これほど突っかかってくるのは何故なんだろう？
……女の子はよく解らない。
いずれにせよ、この親子のおかげで僕は、サマーグリーンでの生活を満喫する事が出来るようになった。楽しく美味しい食事の重要さを実感したものの、残念ながら夕飯については相変わらず変化が無い。

そんなある日の夜遅く、コテージの扉がノックされた。使用している端末の隅には『２３：４１』表示されている。こんな時間に誰だろうと、不思議に思いつつドアを開けると、笑顔のヤハクと仏頂面のシャファンが立っていて驚いた。
「……どうしたの、こんな時間に？」

当然の疑問を投げかけると、ヤハクは興奮気味に声を弾ませる。
「見せたいものがあるんだ。ちょっと付いて来てよ。」
「そう、それは楽しみだな。……で、君は？」
もう一人、予想外の人物に視線を移すと、シャファンは急に目を伏せた。
「……弟に夜遊びさせる訳にいかないもの。」
日頃見せない弟思いで健気な発言をする、彼女の様子がおかしくて、思わず笑いそうになったのだが、睨まれている事に気付いた僕は、慌ててそれを誤魔化した。

二人に連れて行かれたのは、すぐ目の前の海だった。
僕の知る夜の海は、コテージ付近の灯かりだけでは足らず、怖いくらいの闇の中で波の音だけが響いているのだが、今日の海はまるで様子が違っていた。
影にしか見えないはずの、海から生えている3メートルほどの木……のような植物は、タマヒカリグサという名で、実は海草に分類されるらしい。その海草の海の外へと伸びた部分から、ぼんやりと白く光る物がたくさんふわふわと飛んでいた。やがて海水にそれが落ちると、光は更に強くなる。既にたくさんの光の玉が海を漂い、闇を僅かに払拭していた。
「この季節にここに来たんなら、やっぱりこれは見ておかないとね。この時期しかチャンスは無いんだよ？」
ヤハクが得意げに僕を窺う。
「これはあのタマヒカリグサの種子なんだ。人魂みたいだって気持ち悪がる人もいるけど、俺は幻想的でキレイだって思うんだ。」
確かに。この幻想的な光景が見れなかった事を帰ってから知れば、僕は相当悔しく思った事だろう。
暗い中を漂う光の一つを捕まえてみると、それはまるで羽のように重さを感じない。形状としてはタンポポの綿毛のようだが、種子自体はタンポポのようにぶら下がるのではなく、綿毛の中央に存在し

ている。直径は１０ｃｍほどあり、綿毛の部分がぼんやりと発光している。これはどうやって光っているのだろう？　蛍光色より淡いこれは、何の物質が光を発しているのか？　そしてこれが海水に触れる事で、何らかの化学変化を起こし、更に光度を増す……と、いった辺りだろうが、不思議なものだ。
海中の白い光は時間と共に数を増し、暗闇は徐々に退けられてゆく。ぼんやりとしか見えなかった姉弟の姿も、今ではかなりはっきり見える程に明るくなってきた。光る海の範囲も、最初に比べれば確実に広がっている。波による作用だろう。
まるで絵本の中の世界のような不思議な光景に見とれていると、不意に視線を感じた。その出所であるシャファンを見やると、やはり彼女は見事にそっぽを向いた。
……僕は随分と嫌われているらしい。だからどうしたという訳でも無いのだが、ただ非常に理不尽な気はしている。
彼女には二度打たれ、その事を謝ってくれる訳でもなく、おまけに最近よく睨まれる。
彼女は１９と聞いているが、残念ながら僕には、あのくらいの女の子の扱いは分からない。つつけばきっと藪蛇だろう。触らぬ神に祟り無し……昔の人は上手い事を言ったものだ。
それでも何となくやりきれない部分を、僕は溜息と一緒に吐き出した。

その晩は、朝方まで種子が波に漂う様を眺めていた。
朝日が顔を出す少し前に、タマヒカリグサの種子が飛ぶのは止んだ。海面に落ちたそれは波によって、徐々に沖へと流れて行ったが、明るくなってきた浜を見ると、打ち上げられているものもたくさんあった。自然界の生存競争はなかなかに厳しい。
それでも運良くどこかに流れ着いた種子は、いずれ芽を出しどこかの浅瀬から顔を出す。そして成長した暁には、この夜のような光景

をまた繰り返すのだろう……まったくこの世界は途方も無い。

結局僕達は、空が明るくなりきってから別れた。
夜遊びどころか、完全に朝帰りになってしまった。家に戻った二人が、親に怒られない事を祈りつつコテージに戻り、そのままベッドに倒れ込む。
体の疲労や眠気をよそに、興奮状態の頭はしばらく眠る事を拒否していたが、いつの間にか意識は途切れた。

ちなみに、起きて眺めた空の色は、既に茜の色をしていた。眠っている途中に二度ばかりミリアさんの声を聞いたような気がするが、ゴミ箱が空になっている事と、洗濯物の袋が置いてある所を見ると、朝の掃除と、たぶん朝食の誘いだったのかもしれない。
いずれにせよ既に今更だ。今日はもう見事に消えてしまった。
……それにしても、お腹がすいた。さて、夕飯はどうしたものだろうか？

## 困惑（前書き）

以降、時間切れ…です（^^；

## 困惑

翌日、いつものようにヤハクの家を訪ねると、彼は熱を出して寝ているとサニエさんに申し訳無さそうに告げられた。
「まったく、一晩中遊んでた罰よ。」
と憤るのを耳にして、一緒にいた僕はとてもいたたまれない気分になる。
「すみません、あの晩は彼にタマヒカリグサを見せてもらってたので。」
罪悪感を払拭するために謝罪すると、彼女はひどく驚いた様子を見せた。
「あらそうなの？　またホテルに忍び込んで、いたずらでもしてたんだと思ってたんだけど……そう、ならいいわ。」
ヤハクは何を疑われてたんだ？　以前何をやったんだ？　気にはなるが、たぶん気にしてはいけないのだろう。
「……あの、元気になったらメールででも知らせて下さい。」

お大事にと残して、そそくさと彼の家から離れた……のだが、後ろから自分のものではない、もう一つの足音が聞こえてくる。
別に何を喋りかけられる訳でもなく、引き止めるでもなく、ただ気配だけが付いてくる。
「ねぇ、何か用でもあるのかい？」
さすがに気になって立ち止まり、諦めて振り向くと、シャファンも当然のように足を止めた。
「別に……用ってほどの用じゃないけど、弟があれだから……今日は私が案内してあげようかなって。」
いや、僕の後を付いてくるのは、案内とは言わない。しかし一体、これはどういう風の吹き回しなのだろう？

この子の逆鱗はどこにあるのか判らない。何がどうなってその怒りに触れるのか、僕にはさっぱり見当がつかない。だからまた、下手な事を言って引っ叩かれたくはない。
いや、今までは言う前に引っ叩かれたのか。
とりあえず僕は、断る方法について必死に頭を巡らせた。
「いやいいよ。今日は昨日見せてもらったタマヒカリグサについて調べてみるつもりだから。ほら、どういう仕組みで光るのか知りたいし、成長の過程も気になるからね。帰ったらすぐ、誰かレポートにでも纏めてないか探してみる気なんだ。」
「ふーん、そう。あなた研究熱心なのね。」
彼女は見事それで納得し、案内をする事は諦めてくれた。
僕は別に、彼女に嘘をついたつもりはない。帰ったら本当にネットワーク上のレポートを探してみるつもりでいるのは事実だ。

……しかし。
端末でタマヒカリグサのレポートを広げた僕の後方には、シャファンがカウチで暇そうに寝そべっている。
……一体何故だ？
どうにか断ろうと、色々言ってみたのだが……それ以前に、植物のレポートを漁るという時点で、女の子の興味からは完全に外れるはずだと思ったのだが、どういう訳か彼女には効かなかった。
「じゃあ、私はあなたの部屋で涼ませてもらうわ。」
そう彼女は固持し、本当に付いて来た。しかも何をするでもなく、ただカウチに転がっている。
……まったく意味が解らない。彼女の目的は何なのだろう？
それがやたらと気になって、せっかく見つけて開いたレポートに何度目を通しても、さっぱり頭に入ってこない。
「ねぇ、そんなに植物調べて楽しい？」
不意に彼女が声をかけてきて、僕は必要以上に驚いた。
「はっ！？　しょ、植物？……あぁ、うん。楽しいよ？　そもそも

僕は、知らない事を知るのが楽しいんだけど。それがどうかしたのかい？」
カウチに転がる彼女は一度目を伏せて、「知らない事」と、呟いたような気がした。
「ねぇ、私はこの星しか知らないの。あなたが住んでいるのはどんな所？」
それを知って一体どうする気なんだ？　……と、正直そう思わないでもなかったが、しかし、振り返った彼女は予想以上に真剣な顔をしており、誤魔化す気は失せてしまった。
僕はぐるりとイスを回して、きちんと座り直した。
「僕が暮らしてるのはＢＴ－０００５。スコラティクス・プラネタって呼ばれてる。元々学者が多く入植した研究施設の多い場所なんだ。」
彼女はまっすぐ僕を見ていた。
「でもそんなに面白い所じゃないよ。ここと違ってビルばっかりだし、小さい頃から勉強にはうるさくて。住んでる人は、まぁ根は真面目だと思うけど、自分の好きな研究に忠実で、その分あまり人に関心の無い人間が多いんだ。」
この惑星の、ややお節介ながらも賑やかな人たちに触れて、驚く事がたくさんあった。いや、今も彼女に驚かされている最中なのだが。
「ねぇ、みんなあなたみたいにズレてるの？」
……いや、本当に驚かされる。
目を瞬(しばた)く彼女に、僕は何と返せば良いのだろう？
「……僕、そんなにズレてる？」
「自覚無いの？　……そうね、でも、だからズレてるのよね。」
一人で納得している彼女に、もう黙り込むしかない。何かを言えば、更に傷を広げられそうだ。
「ねぇ、薬作ってるって弟から聞いたんだけど、どんなの作ってるの？」
だが、黙っていても彼女には傷を抉(えぐ)られるらしい。訊いて欲しく無

い事を見事に訊いてくれる。その薬が出来なくて、いまここに居るというのに。
けれど僕がそう感じているだけで、それを知らない彼女の責任ではない。
僕は、一度目を閉じてそう必死に思い込む事にする。
「うん、僕はウイルス性の発熱症の特効薬を開発しなきゃいけないんだ。……けど、さっぱりでね。もうどうしたらいいか分からなくなってたんだ。だから、気分転換と仕事半分のつもりでここに来たんだけど、良い所だよねここは。ここの人々は開放的で、陽気で明るくて、世界は自然で溢れてるし。多少暑いけど、もう慣れたから何て事無いし。息の詰まりそうなあの街に比べたら、ここは天国みたいな所だね。」
「良くなんか無いわ！」
しかし彼女は、力いっぱいに否定した。
「……ここは客がいないと成り立たないの。だからみんな卑屈で、媚を売って、私はそういうのが嫌なの！！」
そう叫んだ彼女は僕を睨み、乱暴にカウチから下りた。そして、
「私はここが嫌いなの！！」
そう叫んで、勢い良く出て行ってしまった。

後に残された僕は、ただ困るしかない。
多少苛ついていたせいか、どこか自虐的になっていた自覚はある。
だから、ここへの憧れがそのまま口をついて出た。
しかし、僕が自分の場所に不満を抱いているように、彼女もまた不満を抱いていた……という所か。僕の「羨ましい」という思いが、彼女にとっては納得出来なかった、と。
でも僕は、それが無い物ねだりであると分かっているつもりだ。きっとどこに住んでも、多少の不満は出る。それに僕は今の場所から逃げ出す気は無い。
たとえ敷かれたレールでも、そこを進む事を選んだのは僕自身だ。

だから、一方的に感情をぶつけられるというのは、何となく理不尽な気がする。

やっぱり彼女に関わると碌な事がない。

僕は自分の中でそう締め括り、ホログラフのモニタに広げたレポートに、今度こそ真剣に目を通した。

## 失望

その日の夜にはヤハクから「熱が下がった」というメールが届いていたが、僕は「明後日訪ねるよ」という返事を返した。
さすがに病み上がりの彼を、いきなり連れ回すような事は出来ない。
逆に不満の声が戻って来たが、ぶり返されても申し訳ない。
「病み上がりはしっかり休んだ方がいいよ」と送っておいた。

その夜の随分と遅くなった頃になって、異変が起きた。
僕はもう寝ていたのだが、扉の開くような音に起こされたのだ。
足音を忍ばせた何者かが、僕のいるベッドに上がり込んで来た所で、僕は完全に目が覚めた。
だが、相手が強盗かもしれないと、息を殺してじっと様子を窺う。

チェックインの段階で、僕の認証ブレスがここの鍵になっているはずだ。しかしそれを破るシステムがあるのか？　はたまたマスターキーの女将のブレスが悪用されたのか？
疑うのは嫌だが、もしもそうならここの人間とは倫理観が一致しそうに無い。
……僕はどうなる？
仕事の邪魔にならないように縛り上げられるのか、考えたくも無いが殺されるのか？　騒げば最悪の事態に転がる確率が、跳ね上がるのは間違い無い。
だから僕は目を閉じて、動かないように相手の動きに全神経を集中させた。

何者かは僕に跨り、温かい感触が頬に触れた。
それは明らかに手の平のもので、以外に小さく柔らかい。

そしてその手は、何度も何度も僕の頬を撫でる。
……強盗ではなさそうだが、これはこれで意味が解らない。
正体を求める欲求に負けてそっと目を開けると、それは髪の長い女性で、外から入り込む薄明かりの中目を凝らすと、シャファンが僕の頬を撫でていた。
これは……益々謎が増えた。
「あ、あの……君は何をしているんだい？　いや、そもそも、どうして君がここにいるんだ？」
「ミリアさんに頼んで、私のブレスも登録してもらったの。」
「何故？」
「あなたに用があるから。」
「何の用なんだい？　わざわざこんな夜中に、そんな事までして忍んで来なくても、昼間に声をかけてくれればいいだろう？　昼は昼で何がしたいのか分からなかったけど。それより、今のこの行動は一体何……」
「ねえ、私を買ってくれない！？」
抱いている疑問をまとめて全部ぶつけていると、シャファンはとんでもない事を言ってくれた。
……何だそれは？
「シャファン？　僕はあいにく人身売買なんて危ない仕事には、縁が無いんだ。」
聞き間違いであって欲しいと、一度はとぼけた。
「そうじゃない。……私を抱いて欲しい。」
けれど、僕の期待はあっさりと打ち砕かれた。
聞き間違いではなかった事にガッカリして、静かな怒りが込み上げてくる。
そういう事を生業にする人がいるのは理解している。しかし僕は、それを非難するつもりも、資格も持ち合わせていない。それぞれ事情を抱えての選択の結果だ。
だが、友達の姉である彼女には、そんな事をして欲しく無い。

……何故、彼女はそんな事を言うんだ？
「どうして？」
「私はここから出たいの！　でも、それにはたくさんお金が必要で……。」
彼女は矛盾する。
自分で言っていた事と、この行動が結びつかない。僕はその事に激しい不快感を覚えた。
苛烈な目で僕を見て、媚びを売るのは嫌だと言ったのは何だったんだ？
「でも私にはそんな額を稼ぐ方法なんか、他にありはしないもの……それに、」
彼女の吐き気のするような言い訳に、僕は無性に苛ついた。
もう、これ以上は聞きたく無い。
「君は、いつもそんな事をしてるの？」
「違う！」
自分でも驚くほどの冷たい声に、彼女は声を張り上げて否定する。
「私はそんな女じゃ無いわ！！……今までこんな事した事なんか無いわよ。でも、あなたなら……。」
「僕はいいカモかい？」
「そんなつもりじゃ、」
「シャファン……馬鹿な事は止めてくれないかな？」
僕は体を起こして、シャファンを正面から見た。
「君がしようとした事は、君が馬鹿にしているここの人達と変わらないんじゃないか？」
「ちが……」
「何が違うんだい？　誰の入れ知恵かは知らないけど……幻滅させないでくれないかな？　そんなに自分を貶めるような事はしない方がいいよ。絶対に君のためにはならないからね。」
「そうじゃないの……。」
そう言いながら涙を零した彼女に、ぎくりとした。さすがに言い過

ぎたかと、内心慌てた。
一度深呼吸して気分を切り替え、今度はできるだけ優しく話しかけた。
「いいや。こんな遅くに、女の子がうろつくもんじゃないよ。ほら、送って行くから帰ろう。」
小さな子供をあやすように頭を撫でると、彼女は無言で頷く。
泣いているとはいえ、彼女がこれほど素直なのには驚いた。
「でも、そのためには、着替えないといけないから、少し向こうを向いててくれないかな？」
そう言うと彼女は、小さな声で「ごめんなさい」と呟いて、慌て後ろを向いた。
……不思議だ。
あんなに大胆な事をしでかす割には純情で、僕は彼女に、とてもアンバランスな印象を抱いた。
Tシャツにパンツのままで寝ていた僕は、イスに掛けておいたズボンを手探りで履いて、声をかけた。
「もういいよ。じゃあ帰ろうか？」

朱色に輝く月の光で、夜の景色は仄明るい。
細い道をライトで照らしながら、二人ともただ黙って歩いた。
結局、彼女の家に着くまで、僕たちの間に一切の会話は無かった。

# 雨

いつものアラーム音で目を覚ましたが、いつもより体はだるく、頭の中もすっきりしない。

昨夜のシャファンに腹を立てたせいか、どうしていいのか分からなかったせいか、次に会ったらどう接したらいいのか、彼女を泣かせてしまった事に罪悪感があるせいか。
たぶん全部含めてぐちゃぐちゃで、慣れない事態に混乱したのだろう。昨夜は結局寝付けなかった。つまりは寝不足ってやつだ。

体を起こすのが億劫で、そのままぼんやりと天井を眺めた。
目を閉じれば、再び眠りの淵に落ちてしまいそうで、意識して目を開けた。
そういえば、いつもより薄暗い。窓に目を向けると、差し込む光がいつもより少なく感じる。耳を澄ませばパラパラと雨音もする。
そうか、今日は雨なのか。

ここに来て初めての雨。
濡れた緑の葉は、普段とはまた違った色合いで綺麗かもしれない。

……でも僕は雨が好きじゃない。

スコラティクス・プラネタは、雲が多い分、雨もまた多い。しかし強く振る事は少なく、シトシトと弱い雨が気まぐれに降り注ぐ。
一度強い雨が降ってしまえば、雲は霧散し晴れた空が覗くのにと思う。
けれど半端な雨は灰色の雲をそのまま残す。そして、風に吹かれてどこかに流された雲は、いずれまた気まぐれに、どこかで雨を降ら

すのだ。
スコラティクス・プラネタの閉塞感は、きっとこんな所にもあるのかもしれない。
……いや、駄目だ。感傷に浸っても何にもならない。
だから僕はここに来たのに、これではなにも変わらない。
シャワーでも浴びてしっかりしよう。
僕はそう気を取り直し、勢いをつけて起き上がった。

朝食の時間ミリアさんは。いつものように厨房のカウンターの向こうに座っていた。
「おはようございます。」
「おはようフレッド。昨日シャファンは行ったかい？」
いつもの朗らかな顔に、いつもの挨拶。ただその後ろに昨夜の出来事を確認する一言が付随する。
この一言で、もやもやとしたものが胸中に再び広がる。そうだ、この人がブレスを登録しなければ、昨夜は何も起こる筈が無かったのだ。
「はい、来ましたよ……。どうして彼女のブレスを登録したんですか？」
「おやおや怖い。あんたもそうやって怒る事があるんだねぇ？」
笑っているくせに何が怖いんだ？
……いや、そんな事を考えてはいけない。一瞬過ぎった考えを、僕は慌てて否定した。
「僕は怒っているつもりはありませんよ。ただ確認したいだけです。」
「そうかい？　あんたはいつも澄ましてるから、やっと本音が見られたと思ったんだがねぇ。」
思いがけない事を言われ、心外な気分がした。

いつも心穏やかに努めて、人に真摯に向き合う事。
これが僕の信条だ。
波風を立てず、人と円滑に接するために、これが僕の辿り着いた結論だ。
しかし、こういう問題ははっきりさせておかないと駄目だ。
「はぐらかさないで下さい。ここではセキュリティーとか防犯意識とか、倫理観とかどうなってるんですか？」
しかし今度は彼女が、僕の言葉に心外そうに口を開く。
「どうって、シャファンは良い子だよ？　あたしゃあの子を信用してるから別にねぇ、あたしはただ、彼女の背中を押してやっただけ……って、それともあんた、何か悪さでもされたのかい？　それなら話は別で叱ってやらなきゃならないんだけど。」
彼女はそう言って立ち上がると、腕まくりをする仕草をして息巻いた。
何故そうなる？
僕は彼女の管理意識に一言申し入れたいわけなのだが、彼女の答えはシャファンに対する信用である。
「いえ、驚かされはしましたが、悪さはされていませんよ。」
「……そうかい？　ならいいんだけどさ、人間、素直に正直に、楽しく暮らしてた方が良いのさ。」
彼女の言う事は唐突で、質問に直接答えたものでも無く、僕にはさっぱり意味が判らない。
「で、シャファンは何て言ってた？」
おまけに彼女は、興味津々にカウンターから乗り出してくる。
「何で訊くんですか？」
「そりゃ、手を貸してやったんだ。顛末を知ったっていいだろう？」
それはシャファン本人に訊いてくれ。とも思うが、彼女にまたあの台詞を言わせるのが何故か嫌で、諦めて口を開いた。
「……自分を買わないかって。」
「なんだいそりゃ！？」

「知りませんよ。こっちが訊きたいくらいなんですから。」
そんなに素っ頓狂な声を出されても、あいにく答えは持っていない。
彼女の声で、食堂にいた他の客と、スタッフとして働いているミリアさんの娘夫婦が、好奇の目をこちらをに向けた。
「あぁ……まぁ、うん。なるほど……まったくあの子は、不器用を通り越して器用な子だね！」
僕には何が何だかさっぱり分からないのに、彼女は一人で納得して大きな声で笑い出した。本当に何なんだ？？？
おまけに、複数の視線はまだこちらに向けられたままで、僕は居心地が悪くて仕方が無い。
「まぁ、そう気を悪くしないでおくれ。シャファンが良い子だってのは、あたしが保障するから大丈夫だよ。」
僕は豪快に笑う女将に返す言葉が無かった。

昨夜のシャファンの行動はやっぱり謎のままで、ミリアさんの言ってる意味も分からない。
しかし、彼女が口にした『あの子を信用してるから別にねぇ』『シャファンが良い子だってのは、あたしが保障するから大丈夫だよ』という事がどれだけ大きな意味を持つのかは、さすがに解る。
人から信用を得るには時間と誠意がいる。
おそらくシャファンについては、小さな頃から知っているからなのかもしれない。でも、今迄それが揺らいだ事が無いような印象を受けた。
彼女の信用、良い子、昨夜の言動……よく分からない。

食後のコーヒーを飲みながらふと気付いたのだが、いつの間にか食べ終わっていた。
皿に取ったクロワッサンと、スクランブルエッグ、ツナのサラダにヨーグルト。全部きちんと食べた形跡はあるのだが、味はおろか食

べた事すら記憶が朧だ。
……それほどまでに、僕は昨夜と今朝の事を考えていたらしい。

朝食の後コテージに戻ると、全ての窓を開け放った。
よく分からない事で頭の中が占められている今、せめて部屋の中くらいはすっきりさせたかった。寝起きのままの鬱々とした空気を、全部入れ替えてしまいたかった。
雨はそう強くはないが、朝早くから振り続けているのだろう、気温はいつもより低い。吹き込む風は湿り気を帯び、少しばかり冷やりとする。
肌を撫でていくその空気が、少しだけ僕の気分をシャキッと引き締めた。

雨の降り込まない窓だけを開けたまま、雨音をＢＧＭ代わりにして、これまでに採集した成分スキャナのデータを整理した。
雨は好きではないが、思わぬ時間が出来た……と、考えれば良いのかもしれない。
ヤハクと一緒に散策をして、スキャナに取り込んでいたデータの数は相当な量になっていた。
珍しい植物ばかりで嬉しい反面、この作業量はなかなかに骨が折れそうだ。ヤハクに逐一名前を聞いて、名称欄に入力しておいたのがせめてもの救いだなと、思わず苦笑が漏れる。
とは言え、これは半分以上僕の趣味だ。別に課せられた指名でも、仕事でもない。面倒だからと止めてしまっても、どこからも苦情は来ないし、特別困るような人もいない。
しかし……さすがに好きでやってる趣味まで、投げ出してしまうのは面白くない。

まずはスキャナのデータを端末に転送した。それからそのデータを、

リスト形式のフォーマット入れ込むツールで指定して実行すると、瞬時に膨大なページ数のリストファイルが出来上がった。ここまでは勝手にやってくれる。
だが、ここからが本当の僕の仕事だ。
１つ１つ画像を確認しながら、未登録の項目を埋めていく。
採取日時、場所の座標、温度、湿度、そして構成する成分の組成は、全てリストに記載されている。後、残るのは備考欄。そこに、覚えている限りのヤハクから聞いた事を入力していった。
そして僕は、もっと早くやれば良かった……と、思い出せない事がある度、そう悔しく思った。

作業を始めてどれだけ経ったのか、さすがに疲れて背伸びをすると、雨音は聞こえなくなっていた。
端末の端に表示された時刻を見ると、１６時半になろうとしている。
……またやった、集中し過ぎた。
昼は随分と前に過ぎ、見事に昼食の機会を逃してしまった。
一度溜息を吐いて、体と頭の緊張をほぐすと、意識したせいか、やたらとお腹がすいたような気がする。ちらりとセット・バランス７が頭を過ぎったが、それと同時に、もう少しマシな食品を口にしたいとも思った。
外が明るい事に気付き、腰を伸ばしながらテラスに向かい外を覗くと、灰色の雲はどこかに消え、気持ちよさそうに澄んだ青い空が広がっていた。おまけに、そこには雨上がりのプリズム。美しい宝石のような光の弧が、見事に空を飾っていた。
僕は少し嬉しくなって、風をはらんで浮かび上がるカーテンを捕まえて除け、濡れたテラスに出ると、部屋履きのサンダルが水を跳ね、足に冷やりとした雫が当たった。
そして僕は考えた。
どうせ濡れるのなら裸足でいいか。と、その場で脱いで部屋の中に揃えて置き、そして手すりの所まで行き、改めて虹を眺めた。

昔の人は、その虹の根に宝があると夢想したらしい。
もしも虹を掴まえる事が出来たなら……なんて、考えた事も無い自分は夢が足りない人間だろうか？
『夢想』だと、簡単に言ってしまえる自分は、つまらない人間なのではないだろうか？

もし…もしも、逃げる虹を掴まえる事が出来たなら？

そこまで考えて、その先が出てこなかった。出来もしない事を考えるのは得意ではないのかもしれない。
ただ……僕の新薬開発の仕事も、あの虹のように手の届かないものでなければいい。と、一瞬考えてしまい、ゾッとした。
その縁起でもない考えを、頭を振って必死に追い払う。
出来ると思っていなければ、この仕事はやってられないんだ。

## 秘密の場所

翌日、僕は何事も無かったかのようにヤハクの家に顔を出した。
もちろんシャファンに会えば気まずい思いをするのだろうが、ミリアさんの彼女に対する信頼のおかげで、嫌悪の感情は随分薄まった。
……ただ、あの言動が何だったのかは、まるで解らない。そして、もし顔を会わせた時に絶対に訪れる気まずい思いを、どうやってやり過ごせば良いのかも分かっていない。
もう、なるようになれ。最終的にそんな気分でこの家を訪ねた。そんな事を倦厭して、彼女の弟に会うのを止めるのは、違うような気がする。
実際、病み上がりのヤハクはとても元気で、一緒にいると元気を分けてもらえるような気がした。彼は年下だがここでの師であり、放っておけない弟のようであり、良き友人でもある。やはり僕には、ヤハクに会わないという選択肢は無い。
「今日は特別な所に連れてってあげる。」
いつも以上の勢いでそう言った彼は、余程取って置きの場所なのか、秘密を打ち明ける前のワクワクする思いが、すべて顔に出てしまっている。
ほら、こういう所が可愛いんだ。

こうして短い時間に物事は決定し、僕達は『特別な場所』のあるジャングルへと、向かう事になった。
結局この間にシャファンは姿を現さず、僕の憂鬱が杞憂に終わった事を、正直ホッとしたのは言うまでも無い。

相変わらず、前を歩くヤハクには感心させられる。
何が目印なのか僕にはさっぱり分からないが、彼はまったく迷う事

無く、ひたすら緑の木々の間を目的の場所へと向かって進んで行く。
そして、かなりの樹齢がありそうな、大きな木の所までやって来ると、ヤハクは得意そうな笑みを浮かべて振り返った。どうやらここが目的地であるらしい。
「この奥なんだ。」
奥？　言われて良く見れば木の根元に近い場所には、ぽっかりと黒い虚が口を開けている。そこに彼は躊躇無く潜り込み、中から僕を手招きした。
ぎりぎり通れる程度の穴に頭を突っ込んで中を覗くと、急にライトを向けられて眩しかった。
当然抗議すると、「だって、お約束だろう？」と笑っている。
『お約束』って何だ？　と思いつつも、冗談である事は何となく分かる。僕個人としては面白く無いが、怒るのも違うのだろう。
憮然としながら、まだ湿っている木の内側に手をついて中に潜り込むと、カタリと木の音がした。
「ここから、下に降りられるんだ。」
そう、蓋らしき物を外して、彼が照らした場所には確かに穴が開いており、縄梯子が下ろされている。
準備が良いものだ、いやひょっとしたら秘密基地のようなものか？
　と、本から得た知識を参考にして考えていると、さっきまでとは違った真面目な声が狭い空間に響く。
「先に言っておくけど、ここは秘密の場所だからね。今まで誰にも教えた事は無いんだ。この先にびっくりする物があるけど、誰にも言わないで欲しいんだ。フレッドは約束出来る？」
急に変わった雰囲気に、僕は一瞬戸惑ったものの、
「わかった、約束する。」
と、やや改まって答えると、
「男同士の約束だからね、絶対破るなよ？　もし破ったら日当倍にしてもらうよ？」
と、口元だけが笑っていた。

……これは本気だ。

穴の下は通路のようになっていた。岩壁から察するに人工的なものではなく、自然が作り出した偶然の産物のようだ。

所々に鍾乳石のようなものも下がっており、その下には滴(したた)った雫が石筍(せきじゅん)を育てている。いたる所で水の落ちる音がして、地上と違い肌寒く感じる。

自分のライトを取り出して、あちこち興味深く眺めていると、ヤハクが満足そうに声をかけてきた。

「このくらいで驚いてちゃ駄目だよ？　まだ取って置きのがあるんだから。」

「ここじゃないのかい？」

「違うよ、鍾乳洞なんか秘密にしたってしょうがないだろう？　どっちかって言えば、公表しちゃって、新たな観光資源にでもした方がいいよ。」

確かに、僕は彼の意見を尤(もっと)もだと思った。

しかし僕の知る限り、現在この星の観光資料の中に鍾乳洞は存在していない。もちろん魅力のある景観であるとか、魅力的な鑑賞ルート、そして安全性などが揃わなければ、客を呼ぶ事は出来ないだろう。

しかも、今見える範囲に限って言えば地味な印象を受ける。

この場所、あるいは他に存在するかもしれない鍾乳洞は、存在を知られているかどうかも怪しいが、とりあえず商品価値を見出されてはいないのだろう。

「でも、この先がバレちゃうのは、まだ嫌なんだ。もう少し先まで行くよ。」

人事ながら、この星の観光産業について考えていると先を促された。

『まだ』という言葉が気になるが、彼がさっさと足を進めるので僕は慌てて追いかけた。

それからしばらく進んだ先の壁面に亀裂のようなものがあり、その場所で彼は足を止めた。
「この向こう側なんだ。」
そう言うなり彼は、スルスルと器用に岩に足を掛けて上がると亀裂の隙間へと消えてしまった。この亀裂の隙間も、大人がやっと通れるくらいの幅で、しかも階段3段分くらい高い位置にある。隙間の向こうからは光が漏れていて、外にでも繋がる場所なのだろうかと予想した……のだが、岩に登り亀裂を通り抜けて見た光景は、僕の考えを遥かに越えていた。

正確には、暗い所に慣れた目が明るさに順応するのに少しばかり時間を要し、その間に再び念を押すように言うヤハクの声がする。
「ここは俺の秘密の場所だから、普通は絶対に誰も連れて来ないんだけど……フレッドには特別に見せてあげる。絶対他のヤツには秘密だよ。」
そして何度かの瞬きの後、ようやくを見えるようになった僕はまず自分の目を疑った。そうでなければ、夢でも見てるんじゃないかと本気で思った。
見えたのはカラフルな世界。
外のジャングルもなかなかにカラフルだが、緑の世界とも言える。ここはそれとはまるで様相が違う。そこにある植物は外ではまったく見た事が無い。それどころか僕は今迄まったく見た事が無い。実物は言うに及ばず、好きで色々と眺めた図鑑や研究者のレポートの中でも見た事は無い。
『植物が緑色をしているのは、固定概念でしかない』と、思うほど自由な色に溢れた植物達が、大いに繁っていた。

## 秘めたる野望

目に付く色で多いのは、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫……この色の具合は、まるで光のスペクトルのようだ。
また、濃い色ばかりではなく、合間には柔らかく淡い色合いの葉も見える。
ここの木々には、葉緑素に代わる何かが細胞の中にいるのだろうか？　いや、それどころか、この考えは固定概念で、まったく別の組成をしているのかもしれない。
「ねっ、凄いでしょ？　たぶんここは、テラフォーミング以前の植物が、そのまま残ってるんじゃないかって考えてるんだ。でね、俺はここを『カラフル・ガーデン』って勝手に呼んでる。……でもこれだけじゃ無いんだよね。」
ヤハクは驚くべき仮説をさらりと口にして、また得意そうな笑みを浮かべた……のだが、そこにやたらと違和感があった。
一つ補足しておくが、別に彼のネーミングセンスにではない。
「……なぁ、声が違わないか？」
そう、彼の声がほんの少しばかり低く聞こえた。間違いなく気のせいでは無い。現に今も、自分の声に違和感を抱いている。
「うん、そうだよね。ここの空気は外と少し違うみたいなんだ。」
彼は僕の指摘をあっさりと認めると、入ってきた亀裂を指しながら先を続ける。
「最初に見つけた時にぐるっと回ってみたんだけど、ここは円形の空間になっててね、あそこしか外に繋がる場所は無いんだ、たぶん。」
「円形？」
思わず振り向いて壁面を見ると、橙の蔦に盛大に覆われてはいるものの、その下に覗く白い壁は平坦で、明らかに人工物にしか見えなかった。そして彼の言う通り、壁面は緩やかな弧を描いている。

僕は今迄、このあまりの光景に驚き、ここがどういった場所であるかという事までは考えが回らなかった。

……この場所は一体何なのだろう？　誰がこんな所に、こんな空間を作ったのだろう？

ここの植物達は手入れがされている訳でも無く、延び放題になっている。

人工的な壁は剥がれ落ちてこそいないが、十分に劣化し、様々な色と種類の蔦に蹂躙されている。その事から見ても、ここが完全に忘れ去られた場所である事は、想像に難くない。

「うん、丸い空間。天井には光がそのまま差し込んでるけど、何か透明な屋根があるんだよね。」

「屋根？」

見上げれば確かに天井だ。手を伸ばした所で届きもしない、遥かに高い天井は透明で、幾分汚れた箇所も見受けられるが、空の青と白い雲がゆっくり風に流されているのが、しっかりと見えている。

しかし、ここでは風をまったく感じない。完全に無風の状態だ。今の所、僅かにでも空気の流れを感じる事は無い。

……空気？

そうか、空気が違うからか。ここの空気もテラフォーミングの前の状態なのかもしれない。そしてこの空気を作っているのがここの植物で……地球基準の空気と違うから、音の伝わる速度に違いがあり、音が低く聞こえてしまうのかもしれない。

テラフォーミング以前に派遣されたはずの先遣隊も、僕と同じ違和感を抱いたのだろうと推測される。だから、居住可能の大気にもかかわらず、自然の生態系を守るべきだという反対派の意見を押し切ってまで、テラフォーミングを敢行した？

……なるほど。

実際の所、この仮説が正しいのかどうかは分からない。しかし、これなら辻褄は合うはずだ。

思わぬ所で、抱いていた疑問に納得が行ってしまい、全身に鳥肌が立つ。
しかし、まだ重大な懸念が1つと、とてつもなく大きな1つの謎が生まれた。

「ヤハク？　ここにいて平気なのか？」
「何が？」
「おかしいのは声だけかい？　今は平気だけど、長い時間いると息が苦しくなるとかいった事は無かったかい？　頭がぼーっとしたり、手足が痺れるなんて事も？」
そう、大気の組成の違いが人体に与える影響。
……これが懸念した事だ。
居住可能な空気というのは、あくまでも昔の記事を探して読んで得た知識でしかない。その空気が引き起こす現象を、今初めて知ったのだから、まだ他に何らかの影響が出たっておかしくは無い。
「さぁ？　ずっと居たらわからないけど、半日くらいなら何でもないけど？」
「ここを見つけたのはいつ？」
「うーん、3年くらい前かな？」
「ここに来るのはどのくらい？　特に体に変化はないかい？」
「最近はフレッドと一緒だから、来てなかったけど、それまではよく来てたよ。でも別に異常は無いよ？　そう心配するほどの事じゃないと思うんだけどな。」
「いやしかし、長期的な影響も判らないし……。」
現在、彼を含めたここに暮らす人々は、テラフォーミングが施され、地球と同じ組成の空気の中にいる。あの亀裂程度では、耐性があるなんて事は想像しにくいが、最悪の事態は常に考えておくべきだ。
そしてその最悪の事態は、耐性のあるヤハクには何の影響も無く、一切耐性の無い僕はそれこそどうなるか……想像したくも無いという事になる。

「フレッド心配し過ぎ、考え過ぎ。そういうのは、この先僕が調べていくから、先にやらないでよ。……フレッドって、こういう事になるとよく喋るよね。本当にバランス悪過ぎ。」
……一回りも年下の子供に、呆れ顔で溜息を吐かれた。
だが、呆れられても溜息を吐かれても、これが僕の性格である以上、どうしようも無い。いや、そんな事よりも注目するべきは彼の台詞だ。
「ヤハクは、ここの調査をしたいのかい？」
僕がバランスの悪い人間だって事は、自分でよく分かっている。それよりも『この先僕が調べていく』と言った事に驚いたのだ。
「そうだよ。だって俺が第一発見者だしさ？　自分の手で調べてさ、それを世間に公表してさ、ドーンと驚かせてやりたいって思わない？」
だから彼はこの年で、こんなにも色々詳しく、更にもっと詳しく調べるために、僕に興味を持ったのだろう。
そもそもヤハクと僕は、金銭の絡む関係である。しかし、僕はそれでもいいと思えるほどに彼に信頼を寄せている。彼が教えてくれた事は、ここや植物の知識だけではない。彼と行動を共にする度、僕がいかに狭い世界で暮らしていたかという事を、まざまざと突きつけられた。
そしてこうも思う。結局は利用されているのかもしれない。しかし、こういう形でならば大歓迎だと。
僕が彼に返せる事があるのなら、何だって教えたい。そう、心から思う。
「だから、まだ誰にも内緒なんだ。俺がもっと大きくなって、色々学んで、ここを本格的に調査出来るようになってさ、反論出来ない程の論文でも書いて、世界をあっと言わせたいんだ。証拠所か実物はここにある訳だから、後は俺が立派になれば良いだけでしょ？」
とてつもなく大きな事を平然と言い切った彼に、僕は言葉が見つからなかった。

「世紀の発見の栄誉は渡さないよ？　歴史に名を残すのは俺だからね？」
何て怖いもの知らずなんだろうと、正直思った。
でもその反面、その無邪気で自由な心をとても羨ましく思う。
「……ヤハクの夢は大きいんだな。」
「夢？　夢なんかじゃないよ。これは野望だよ。」
「野望？　……僕はたぶん夢までだな、野望なんか抱いた事無いな。」
薬を完成させる事は、実際『夢』なのかどうかすら甚だ疑問だ。『幼い頃からの刷り込み』だという可能性は、やはり捨てきれない。
今では『意地』と言い換えても構わない。
でも、夢と言った方が少しだけ気分が軽くなるような気がして、僕はこちらの言葉を選んで使った。
しかし彼の考えは、僕のそれとは真っ向から対立する。
「うーん、やっぱりさ、大きい事言っておいた方が、何か格好良くない？　夢って言うと、かわいらしい感じがするし、結局叶いそうに無い気がするんだよね。でもさ、野望って言えば、スケールでっかくて、意地でもやり遂げてやる！　って、気になるでしょ？」
本当に彼と僕は、まったく違う。
「そっか、……そうだね。」
生意気そうに不適に笑う彼の姿を、僕は心中で賞賛しながら眺めた。
だから僕は、彼にこんなにも惹かれるのだろう。プラスとマイナスが引き合うように、眩しいばかりの彼を、僕はとても好ましく思う。
……っと、誤解しないでもらいたいが、もちろんこれは、友人としての話だ。

## カラフル・ガーデン

「まだまだ。これだけじゃ無いんだって、こっちこっち。」
前を行くヤハクの姿は、いつもよりはしゃいでいるくらいで、そう変わらない。なのに、声だけが違い、聴く度に苦笑いしたくなる。
「これ以上珍しいものってなんだい？」
そして自分の発する声に対する違和感も消えない。まるで、もう一度変声期を迎えたかのような気分になる。
「まだ言う訳ないでしょ。それは見てのお楽しみって事なんだから。」
ヤハクはずっとこの調子で、まったく何も教えてくれる気は無いらしい。仕方が無いので、僕は周囲を見回しながら、ただ後をついて行く。

彼にカラフル・ガーデンと名付けられたそこは、伸び放題の枝の多くが、大いに葉を繁らせている。時に行く手の邪魔をするものもあるが、避けるのに差ほど苦はない。
僕達が歩いている場所と植物の生えている場所は、そもそも明確に区切られている。僕達の足元には、落ちた葉や枝の堆積物で埋もれかけてはいるものの、赤と茶のモザイク模様が覗いており、それはどう見ても煉瓦敷きの遊歩道だとしか思えなかった。
途中で細い水路や、それが注ぎ込む池があり、そこにはきちんとエンジ色の柵が設けられている。柵を触った感触から金属のようではあるが、しかしそれだけでは素材が何なのかまでは分からない。柵の根本や手摺りのあちこちが、黄色い苔のようなもので浸食されているのだが、錆びたり朽ちたりしたような様子は無い。
柵から身を乗り出して池の中を覗くと、水中には見たこともない青い花が咲いていた。
そう、似ているものを挙げるならば、図鑑で見ただけの牡丹という

花だろうか？　バラのように幾重にも重なる花びらを持つ、赤や白の豪奢な花。ジャポネの伝統衣装の着物の柄にも使われると書いてあったが、僕は別にジャポネ文化のファンでは無いし、ジャポネをルーツに持つ友人も、そんなに伝統に関して熱心な方では無かったので、読んだ事以上の知識を持ち合わせてはいない。
池の水面は鏡のように静かで、底が見通せるほど水も澄んでいる。その事から、この惑星では生物の発祥までは到っていなかったのだろうと推測された。水中には見事なまでに生きる者の姿が無い。魚や虫は言うに及ばず、この水質ではプランクトンの存在すら怪しい。そして、その中に唯一美しく咲き誇る花は、それ故に作り物の飾りや、悪く言えば毒や罠のようにも見え、何となく薄気味悪い気がした。
水中の花は池の所々に咲いており、少し離れた場所には青だけでなく違う色も見て取れた。しかしこれは生理的、本能的な部分なのだろうか？　生命をまるで感じない水には、魅力を感じる事が出来なかった。

そこからさらに進むと、白っぽい一枚の丸い大理石のようなものが敷かれた場所に行き着いた。
直径は3メートルくらいだろうか？　そしてこれは3本の柱で支えられた天蓋のようなもので囲われている。ここには堆積物がさほど無く、きれいに円の姿が見えているのだが……ヤハクのやった事らしい。
彼に言われてその中央で上を見ると、1メートルほどの直径のレンズのようなものが填められているのが確認出来た。
これが何であるのか？　何のためにあるのか？　誰がこんなものを作ったのか？　それは僕には分からない。しかしここが人工物である事は疑いようが無い。
……まったく、本当に今僕達は、とんでもない場所にいるらしい。

これが、とてつもなく大きな1つの謎だ。
ここが、今この惑星に暮らす人々が作ったものだとは到底僕には思えない。技術や文化の違い。何より長年放置され、忘れ去られている理由の説明がつかない。
しかし、今ここに暮らす人々よりも以前に、地球起源の人類がここに居た……というのも考えにくい。技術の違いがやはり存在する。移住はテラフォーミングの後であり、もしもそれ以前に地球人が辿り着いていたとしても、たかが少人数の冒険家が住み着いたくらいでは、こんな施設が必要だとは思えない。
となれば、ここは別起源の知的生命体の遺跡……と、いう事になるのかもしれない。
これだけでも十分驚嘆に価する。もしこれが世間に発表されれば、歴史に名を残す事は間違い無いだろう。
人類が再度宇宙に出る切っ掛けとなった『パーフェクトJ』以降300余年。未だ別起源の知的生命体に出会ったという記録は無い。ここサマーグリーンに期待が寄せられたものの、植物以外の生命体には出会えなかった。
しかし、これはニアミスと言えるのでは無いだろうか？
別起源の知的生命体の遺跡。その姿を見る事が叶わずとも、その可能性……いや、存在の証拠を提示している。もしこの想像が事実なら……本当に大変な事だ。

「ここに落書きがあるんだ。ひょっとしたら、地球以外の人類の作かもしれないよ？」
この空間の端、赤い蔦に覆われた壁に行き当たった所で、これまで黙っていたヤハクがようやく口を開いた。
僕が考えていたのと同じ事を、彼があっさりと言ってのけた事に驚いていると、僕を見てニヤリと笑う。そして、しゃがみ込んで蔦を避け、壁の一部を露にした。
「ほらここ。」

……さすがに一人でここを解明しようと言うだけの人物だ。あの結論に達して、『後は俺が立派になれば良いだけだ』と言い切った事に、改めて感心した。

溜息を1つ漏らして彼が示した壁を覗き込むと、なるほどと思う。確かにこれは『落書き』と表現するのが相応しい。
そこに描かれていたのは、小さな女の子が描いたような拙く可愛らしい雰囲気の絵だった。人のような形をしているが、頭が大きく、手足も不自然に長い。そして、非常に耳が長く、その部分に違和感を覚える。
この彩色の無い線だけの落書きに、これがここに居た知的生命体の姿なのかもしれない……と期待する反面、さすがにこれでは信憑性に欠けるとも思う。
半信半疑の僕に対して、ヤハクは確信を抱いているように見える。ひょっとしたら、他にもこんな場所や、物的証拠を見つけているのかもしれない。
彼が最初に言った、『ここに詳しい』というのは、ひょっとしたら、そういう意味も含まれているのだろうか？
「ここに、いつまでこの人類がいたのか知らないけど、テラフォーミングよりは随分以前にいなくなったんだとは思うよ。」
「どうしてそう思うの？」
そう尋ねると、彼は手をかざして天井を見上げた。
「さすがに知的生命体の住む星を、無理やり改造して入植するなんて事は出来ないでしょ？　きっと科学力は俺達より上だと思うし、地球人ごときにやられてはいないよ。でもちゃんと調べられないから、全部僕の推測、それから半分は願望。」
「そっか。」
「うん。それにさ、今ここに住んでる身としては、滅んだってのより、何かの事情で星を捨てなきゃいけなくなったけど、どこかで生きてるって思ってる方が良いしね。」

そうニヤリと白い葉を覗かせて、彼は笑った。
まったく、そんな考え方が出来る事が心から羨ましい。僕ならもっと悲観的な結論を想像してしまいかねない。
「年代測定機があれば、とりあえずここが作られた時期が分かるんだけどな、まだ僕には手が届かないし、使い方もデータの読み方も分からないのが本音なんだよね。」
まさかとは思うが、僕が払う日当の使い道は調査機器の購入なのだろうか？
「さすがにそれは僕も持ってない。けど、前に使った事はあるよ。データの読み方くらいなら教えてあげられるけど？」
「本当！？」
「あぁ、他にも僕に出来る事なら、何でも協力するよ。」

僕は本心からそう思っているのだが、彼は瞬時に雰囲気を変えて訝しそうに僕を見た。
「ねぇフレッド。ここの事さ、フレッドだから教えたんだ。」
「……うん、それは光栄だな。」
何がきっかけだったのか、今僕は量られている。彼にとっての見方か敵か、内心でドキドキしながら彼が何を言い出すのか注意深く待った。
「うん特別。」
ヤハクは良くも悪くも子供である……だからこそ、知り合って日の浅い僕なんかに、あっさり重大な秘密を漏らしたのだ。
「本当にここの事秘密にしておいてくれる？」
信頼はされている。ただその確信は持てないのかもしれない。
「大丈夫、約束する。僕は絶対にここの事を公言しないよ。」
「本当に？」
「本当に。だって君が発表するんだろう？　僕は、未来の博士のために協力は惜しまないよ？」
「……何で？」

「何でって、それはもちろん、友達だからさ。」
この答えに、彼は笑った。
「フレッド、その台詞恥ずかしい！！」
「……失礼だな君は、僕は至って真面目に、」
「分かった、分かったから。うん、やっぱりフレッドはフレッドだ。」

そりゃ僕だって、恥ずかしかったさ。
……でも、今は言うべき時だったんだ。
だって、こんなに友達になりたいと思ったのは、生まれて初めてだったんだから。
そう、僕はヤハクからの信頼が、どうしても欲しかったんだ。
一回りも下だけど、楽しくて、眩しくて、頼もしくて、放っておけない無鉄砲な彼だから。

## 困惑の事由

翌日からは、午前のうちにあちこち散策して成分スキャナでデータを採取し、午後からはヤハクと一緒にコテージに戻り、そのデータの整理をした。
スキャナの使い方や色々なデータの読み方、持参した薬品の説明に、参考になりそうな文献へのアクセス方法等、出来る限りの範囲で彼に協力するのが主な目的なのだが、彼がいる事で僕にも十分にメリットがある。備考欄の記述が各段に増えるのだ。

こうして地道にファイルに纏める作業は、相当に骨が折れるにもかかわらず、実際の所データとしては物足りない。出来る事ならば実物をサンプルとして持って帰りたい。そうすれば社の設備を拝借して、もっと大掛かりな分析器で詳細に調べる事も出来る、そこから必要に応じて様々な物質を抽出する事も可能だろう。
しかし、そのためには検疫や諸々の法律に抵触しないように、色々な手続きを通さなければならない。
社を通じてであれば、僕は申請書を出して到着するのを待つだけだ。事務手続きや交渉は専門の誰かがやってくれる。そして僕はその事をきっと当然だと思うのだろう、いや当たり前過ぎて今まで気付きもしなかった。今回持ち出すための方法を調べ、情けない事に初めて気付いた。
『サマーグリーン』からの持ち出し申請、そして『スコラティクス・プラネタ』への持ち込み申請。研究資料としての外来種規制法の適用外申請、害虫・有害ウイルスがいない事の検査報告書、その他僕自身に関する証明等、気の遠くなるような手間がかかる事を初めて知った。
しかも量が量だ。この島の固有種の数だけそんな手続きを通そうだなんて、もはや正気の沙汰では無い。

……さすがに個人でそこまでする気は無い。いや、製薬会社で新薬の開発を生業にしていても、所詮は一会社員に過ぎない。ただの個人の手続きがそう簡単に通るとも思えなかった。
だから僕は、成分スキャナでデータを採取しファイルに纏めるという所で妥協したのだ。

そんな作業を繰り返していた3日目の夜、突然鍵の開く音がして扉が開いた。
もちろんヤハクは夕方には帰しているし、彼はここの鍵を開ける事は出来ない……はずだ。
確証が持てないのは前例があるからで、おそらくはその前例の人物が、今入ってきた人物であると推測される。だから僕は別に振り向こうともせず、招かれざる客には構わず作業を続行し続けた。ここにいられる時間はもうそんなに長くない。今のこの作業をできるだけ多くこなしたい。
しかし、扉が閉まる音がして以降、いつまで経っても僕が指で叩く机の音しか聞こえない。足音もしない、移動したような気配も無い……さすがに根負けして、入り口の方を振り返る。動く気配の無い彼女は、最早不審でしかない。
「……ひょっとして、ずっとそこに立ってるつもりとか？」
「ま、まさかそんなはず無いじゃない！　ただ……何か忙しそうだなって、声をかけそびれただけよ。」
予想通りの人物であるシャファンは、何故か動揺した様子で早口にまくし立て、つかつかとカウチまで歩くと、乱暴に座り込んだ。

しかし座り込んだ彼女は、またも沈黙する。
そして僕は理解に苦しむ。彼女が何をしに来たのか分からず、そうであるが故に、僕はどうしたらいいのかも分からない。
もし今ここで、『入り口で立っていた事の説明が足りないよ。』……などと、率直な事を言おうものなら、また平手打ちを食らいそう

ので、止めておいた方が賢明だろう。
……まったく、どうして彼女はいつも不機嫌なんだろう？
とは言え、さすがにこのままでは時間が過ぎるばかりだ。
「所でシャファン……またこんな遅くに何の用なんだい？」
時刻は２２時を過ぎた辺り、若い女の子が一人でうろついて良い時間とは思えない。そして前回の事もあり、さすがに警戒してしまう。もし、もう一度同じような事をされたなら、僕は完全に彼女の事を軽蔑するだろう。しかし、出来る事なら良き友であるヤハクの姉を、そんな風に思いたくは無い。
彼女が何を言い出すのか、戦々恐々とした思いで言葉を待つが、彼女は「えーと」とソワソワするばかりで、なかなかその理由についての話を切り出してはくれない。
「ひょっとして、仕事の帰り？」
店の終わる時間が何時なのか確認していないので知らないが、１つの可能性として訊いてみた。そうでもしなければ埒が明かない。
「えっ？　あぁ、うん、そうなの。仕事が終わって帰りに寄ってみたの。」
しかしその答えは行動を示すだけで、理由には当たらない。
そしてまた、会話は途切れる。
いい加減痺れを切らした僕は、１つ溜息を落として再び端末に向かう事にした。本当にここにいられる残りの日数はもうそんなに長くない。できるだけ多くの資料を急いで纏め、帰ってからの実験に利用したいんだ。

ホログラムのモニターに視線を戻して、机の上に映し出されたキーを叩いているうちに、シャファンの事は頭の中から完全に消えた。
不規則に響く指の音も気にならない、集中によるトランスじみた状況の最中、僕は不意に首を絞められ、突然現実に引き戻された。
……もちろんシャファンの仕業に他ならない。
締められたといっても苦しいほどではなく、ただ相当に驚かされた

だけなのだが。実は理由は他にある。
「なっ、こら、急に何をするんだ！？」
背中に当たる柔らかいものと、店での化粧の残り香なのか、ほんのり甘いそれに焦りを覚え、慌てて彼女を剥がそうとしたが、掴んだ腕の細さに僕はますます慌てた……な、何がしたいんだ彼女は一体！？
「シャファン？　あのさ、何ていうか……非常に困るので離れてくれないかな？」
なかなか離れてくれない彼女に仕方なく直接お願いすると、一度強く締められてようやく離れてくれた。
「鈍感。」
喉仏の辺りを圧迫されて、思わず咳き込んでいた時に彼女はそう言った。
『……何が！？』僕はそう言いたかったのだが、まともに声が出るようになる前に、
「馬鹿っ！　私、帰る！！」
そう彼女は喚いて、来た時同様……いや、更に機嫌を悪化させてここから出て行った。
……何だったんだ一体？
僕は訳が解らぬまま、しばらく呆然と閉まった扉を眺めてしまった。

翌朝、とても甘い匂いのする、アサガオに似た真っ青い合弁花をスキャンしながら、ヤハクに昨夜の出来事を話すと、盛大に大笑いしてくれた。
ちなみにこの花は、一般的なアサガオの半分程度の大きさで、逆に蔓に咲く数は倍以上なので、小さな花が大量に咲いている印象がある。葉の形は別物で厚みがあり形状も菱形状卵形である。
姉の奇行をそこまで笑わなくても……と、さすがに諌めようとしたが、

「……両方とも、どっちもどっちだ。あぁ、もう俺、腹痛い。」
笑いながらそう溢し、大袈裟に腹を抱える姿に僕は更に頭を抱えた。
「両方ともって、どうして僕まで？　僕は何もしてないぞ？」
そしてそんな僕の姿を見て、彼は更に笑う。
「やっぱり気付いてない……っていうか、それで気付くかっての！
　駄目じゃん、姉ちゃん！！」
彼一人だけ何を納得しているのか……まったく解らないのだが、明らかに馬鹿にされているようで、何となく気分は良くない。
「……なぁ、君の姉さんは、一体何がしたいんだ？」
この質問にヤハクは笑うのを止め、僕をマジマジと見た。そうされると、どうにも落ち着かないので視線を明後日の方に向けた。
「不器用女に、鈍感男。俺にしてみれば面白い組み合わせだと思うんだけどな～。」
組み合わせ？　本当に何の話だ？
「……そんなに姉さん魅力無い？　それとも既に意中の人でもいるの？」
「は？」
「違う？　やっぱそんな風には見えないんだよな。姉ちゃんみたいに気が強いのは、やっぱ駄目？　確かに可愛げは無いけどさ。そうだな……フレッドは真面目で大人しいから、もっとおっとりしてる方がいいのかな？」
「いや……。」
「あのさ、結局フレッドのストライクゾーンって何処？　どういうのが良いの？」
ここまで言われれば、さすがの僕でも理解出来た。
……ただ、何故なのかは理解出来ない。
「僕の女性の趣味はどうでもいいから。……でも、シャファンがって……何で？」
「知らない。だってこういうのは理屈じゃないもん。」
この１４歳の少年は、妙に悟ったような事を言う。一回りも年の離

れた子供に、恋愛について諭される僕って何だ？
「好きなら好きってさ、そういうのがここの人間。気質ってやつ？
情熱的に裏表無く、断られても恨みっこ無し……まぁ、姉ちゃんは例外だけどね。」
自分で言って笑う彼に、僕は逆に慌てる。
「待て、その例外は一体どこに掛かるんだ？」
彼は一瞬笑うのを止め、言葉を反芻してまた笑い出した。
「やっぱフレッドは面白いや。」
いや、だから、笑って誤魔化さないでくれ。
「……でさ、フレッドは、姉ちゃんの事どう思ってんの？」
そして見事に話を変えられた。
「どうって、綺麗な子だと思う……けど、気が強いのは事実で、何考えてるか解らなくて、振り回されて、喧嘩っ早い……って、気を悪くしないでくれよ？　聞いてきたのは君だ。」
「別に怒らないよ、俺もそう思ってるもん。」
事も無げに答えた彼は、少し何かを考えて再び口を開いた。
「ねぇ、フレッド。もう1つ内緒の場所に連れて行ってあげる。」
「まだ他にもあんなのがあるのかい？」
思い出すだけでも鳥肌が立つ。切り取られたように残された過去の遺物『カラフル・ガーデン』もし、まだ他にそんな場所があるのなら、是非、無理を言ってでも見てみたい。
しかし、彼の答えはそういったものでは無かった。
「ううん、そういうんじゃなくてさ、今度祭りがあるんだ。ここに住む者だけの秘祭ってやつ？」
「……それ、見つかると捕まったりしないよね？」
「大丈夫。別に部外者を入れるなってんじゃなくて、先祖の弔いって感じの祭りでさ、観光客呼んで大騒ぎしたくないってだけだから。」
「僕、十分観光客なんだけど。」
「大丈夫。騒がなきゃ誰がいたっていいんだって。明後日の夜だか

ら夕方迎えに行くよ。傍若無人な姉さんの分のお詫びって事でさ。」

ヤハクの隠しきれていない含み笑いは気になるが、祭り自体はせっかくだから見てみたい。『秘祭』という言葉に、興味と共に少しばかりの恐れも抱いた。子供の頃、面白半分で読んだ、昔の人々の奇祭の記述が頭を過ぎったせいだ。

地元民以外に姿を見られないように、こっそり真夜中に行うだとか、通りすがりの旅人を攫い、生贄にして神に捧げるだとか、選ばれた少女を神に嫁がせるとか、事実かどうかなんての知らないが、相当にバイオレンスで非人道的な内容のオンパレードだった記憶がある。

だがここの秘祭は、きっとそんな事は無い。

……そう、僕はヤハクを信じている！

ヤハクは祭りについても、教えてはくれなかった。「一見は百聞にしかずだよ。」それだけ言って、次の木の場所へさっさと移動してしまう。

その言葉は、僕がここに来て心底実感しているので反論のしようが無い。

だから、僕は彼の背中を追いながら『何でシャファンが僕なんか？』それだけを考えていた。

どうしてもこれは、理解出来ない事だったからだ。

## 死んだ後の世界

二日後の夕方、約束通りコテージにヤハクが迎えに来た。
『秘祭』という響きから、もしかしてガチガチの民族衣装でも着ているんじゃないかと期待して、その反面危惧もしていたのだが、普段通りのTシャツに短パン姿のヤハクを見て、密かにホッと胸を撫で下ろした。もし一人だけ普段着という状況ならば、あまりにも目立ってしまう。
かと言って、逆に半裸でしかないあの衣装を自分が着るのにも、かなり抵抗がある。レストランのショーで見た男達は立派な体躯で見栄えがしたが、自分の体であれとなると目も当てられない。

「ひょっとして、何かまた妙な事考えてた？」
不意に声を掛けられて、びくりとしてヤハクを見た。木々に囲まれた道を先導していた彼は、思いっきり疑惑の目を僕に向けて、呆れた様子を隠そうともしていない。
「いいや、別にそんな事は……。」
まったく、相変わらず利発で鋭いな。
「そう？　まぁいいけどさ。別に怖い目になんか合わないから、そう心配しなくていいよ。あぁでも、大人は大変かもしれないな。」
「はぁ？　何が大変だって？」
「内緒。あ、その道こっち、墓地の前の広場でやるんだ。」
気になる事をこぼした彼は、僕が一度も通った事の無い道を進む。以前二人でこの辺りを通りがかった時は「そっちに用は無いからこっち」と、違う場所に案内された。なるほど、こちらは墓地に向かう道だったのか。
『先祖の弔い』と確かに言ってはいたが、まさか直接墓地の前で行われるとは思ってもいなかった。

とはいえ、僕には墓地という場所に馴染みは無い。
僕達の常識では、葬儀が済むと亡骸は分解される。人間も自然界の一部であるという考えから元素の塵に還るのだ。亡骸では無く思い出の中で故人を偲ぶ。人の意識、魂とも呼ばれるものが抜け、動かなくなった亡骸は所詮ただの入れ物にすぎない。だから、僕の住む星には墓地という土地は存在しない。無論これがスコラティクスプラネタだけの考え方だというのは知っている。だからなのだろう、スコラティクス・プラネタの人間はドライだと言われてしまう。

この辺りではどう弔うのだろう？
イメージとしては土葬が似合うが、衛生面や土地の利用法の問題で今時そんな事をしている場所はさすがに無いはずだ。
そういえば以前、腐乱した死者が起き上がり人を襲う大昔のパニック映画を深夜にやっていた。僕にはその内容がよく理解出来なくて、つい最後まで見てしまい翌朝起きるのが非常に辛かった覚えがある。何故死体が動き回れるのかという点は、ファンタジーに属するので構わない。死者の亡骸が、葬儀の後も腐乱するほど長い時間存在している事に驚いたのだ。
大事な人が徐々に腐り朽ちていくなんて事は、とてもじゃないが考えられなかった。その時は愕然として、理由を知ろうとモニターを食い入るように眺めていたのだが、分からないまま映画は終わってしまった。後日、この映画が作られた当時は『土葬』という方法が一般的である事を知って、僕はやっと納得した。文化の違いなのだと。

墓地へと続く道は映画の世界とは違い、明るくきちんと整備されていた。道傍には花が植えられ、むしろ他の場所よりも素晴らしい。木々が開け広い場所に出ると、既に多くの人が集まり広場はざわついている。広場の向こうは一段高くなっていて、そこへ上がる階段が設けられており、その階段を上がった両脇に白くて四角い大きな

柱が立っていた。何かしらの彫刻が施されているように見えるが、遠過ぎてここからでは詳細までは分からない。
「なぁ、あの白い柱は何なんだい？」
ヤハクに尋ねると、彼は待ってましたとばかりに嬉しそうに話し出す。何となくそんな気はしていたが、やっぱり彼は人にものを教えるのが好きなのだろう。学者を目指しても実験や証明だけにのめり込む先生にはなりそうに無くて、少しばかり安心した。
「あぁ、あれはね『神の門』って呼ばれてる。あの柱より向こうが墓地になってるんだ。」
神の門？　何とも神秘的な響きのある言葉だ。だが『神』と言う言葉は漠然とし過ぎてよく分からない。
「それはどういう物なんだい？」
「うん？　あぁ、ここでは死んだらあの門を通って神の世界、つまりあの世に行って、いずれ精霊になるって言い伝えられてるんだ。」
何、精霊？
懐かしい言葉ではあるが、まさかこんな所で聞くとは想像もしておらず、一瞬思考が停止しかけた。
僕はこう見えてファンタジーが大好きだ。現実は証明出来る事、実践出来る事が尊重され、回りは競争社会のライバルばかりだった。だから本の不思議な世界に夢を求めた時期がある。
サラマンダーやシルフ、ウンディーネ、ノーム、フラウ、ウィル・オー・ウィスプにシェイド。証明出来ない不思議な者の存在する物語や、ゲームの世界のキャラクター達が僕の頭の中に甦った。そしてその時のワクワク感もじんわりと心の中に広がっていく。しかし、いやいやまさかそんな事は無いだろうと、その考えを否定する自分もいた。
「……ここの精霊って言うのは、どんなイメージなんだい？」
「イメージ？」
期待半分、疑い半分の質問に、彼は眉を顰めてしばらく考え込んだ。僕はそんなに答えにくい質問をしてしまったんだろうか？　だがど

うしても訊きたかった。そうしなければ僕は、子供の頃の夢が実在すると信じてしまう。そして都合の良いイメージを抱いたまま帰る事になってしまう。

「うーん、そうだな。自然に溶け込んで……どこにでも居て、それでいて姿は見えない？　花から生まれて、そのうち他の魂に変化していく……とか言われてるけど。」

僕の読んできた話の世界とは大きく異なるけれど、それはまさに夢の世界と言うべきだろう。世界には自然の一部たる精霊達が溢れている。しかもそれは人……いや、すべての魂の生まれ変わりだという、そしてそれは魂の種でもあるのだ。なるほど、精霊というのは、いわば輪廻転生の浄化期間といった所だろうか？

人の信仰と死の概念、そして世界との繋がり。これはとても興味深い思想だ。安易に物語やゲームと一緒にした事を、僕は申し訳なく感じた。

「でも、信じてるかどうかってのは別の物だよね。」

だがしかし、ヤハクは一切の容赦が無い。

……おいおい、それを言っては台無しだ。彼の語った話にかなり引き込まれていた僕は、無理やり現実に引き戻された気分になった。

さすが科学の時代と言うべきだろうか？　夢物語が子供にこうも否定されるとは。いや１４歳を子供と言ってしまっては、確実に彼の気分を害するだろう。

だが、ヤハクだけがどうだと言うのでは無く、本の世界に憧れを抱いていた頃の僕も、それが作り話であると分かっていたからこそ、信じられない不思議な世界の中に夢を見ていたのかもしれない。

…そう考えると、我ながらなんて可愛げが無い子供時代だ。

やがてざわついていた空気が静まり、人の輪の向こうから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「そろそろ始まるみたいだ。もう少し前に行こう。」

それにすぐさま反応したヤハクに、僕は否応無く腕を引っ張られて、

輪の形に集まった人々の最も内側にまで連れて行かれた。つまり一番前という訳なのだが……いいのか？　僕は完全に部外者だぞ？
こんなに堂々とした場所に連れて来られるのは、小心者には居心地の悪い気分しかしない。そして、目の前で話しをしている人物を見て、更に身の引き締まる思いがした。
聞き覚えがあるのは当然だ。通い慣れた商店の主であるパウじいが、首に仰々しいほどの飾りを下げて、先祖への感謝の言葉と、この祭りの開始を宣言した。
「パウじいはここの長なんだ。」
横のヤハクからすかさず解説が入り、始めに抱いた風格の理由に納得が行った。
話を終え、中央から立ち去る前にぐるりと周囲を見回した彼は、一度視線を僕で止め、意味ありげににやりと笑った。
その理由は図りかねるが、その行動で『部外者』がここにいる事の遠慮はかなり軽減された。僕がここにいる事を長は否定しなかった。それは何かを認められたに等しい。
それがパウじいの気遣いだというのは分かる。だが、それだけが理由であるようには思えないほどの含みのある笑は、僕をやたらと妙な気分にさせた。

## 本音

薄暗くなってきた広場を揺らめく炎が照らし出す。
明かりは所々に置かれた篝火と、長が直々に火を入れた中央の大きな焚き火だけだ。この場所には人工的な照明は一切存在していない。
いや、僕のポケットに懐中電灯は忍んでいるが、もちろん点けようなんて気は更々ない。この幻想的な雰囲気を壊すなんて勿体無い事はしたくない。
白い光の電灯とは違い、炎の光は弱くはあるが心に染み込むような温かさがある。そして同時に恐怖にも似た緊張感が心のどこかを占有する。

それぞれに何かを言い合う雑然とした空気を、突然鳴った太鼓の音が切り裂いた。人々は口を閉ざし、拍動よりも遅いリズムだけが辺りに響く。そこに男達の低く唸るような声が次第に重なると、男が一人、輪の中央に歩み出た。
白いヒラヒラした飾りの付いた印象的な衣装を纏った男は、焚き火を背にして自身の身長よりも長い棒を振り回す。
これは『神の門』を開くための『鍵の踊り』だ。と、隣のヤハクがこっそり教えてくれた。
暗がりに映える白は、男の動きに合わせて様々に揺れる。棒で地面を叩くリズムそのものが鍵であるらしく、男は何度も何度も同じように棒を地面に振り下ろす。そして突如気迫の篭った声を上げて殊更強く地を打つと、男はそのまま動きを止めた。同時に唸りのような節も太鼓の音もぱたりと止む。これで終わりなのだろうか？
しかし、拍手も歓声も起こらない。ただ薪の爆(は)ぜる音だけが、不規則にパチパチと辺りに響いているだけだ。
男は肩で大きく息をしながらも、叩き付けた姿勢のままで動かない。
その緊張感に見ているこちらまで息を飲む。

それから男はよく分からない言葉で何かを叫び、ゆっくり立ち上がると静かに輪の外に出て行った。
こっそりヤハクに尋ねた所、分からない言葉は「鍵は開かれた」という意味なのだそうだ。祖先の人々が、地球時代に使用していた少数民族の言葉なのだが、共通言語の使用により廃れ、今ではきちんと使える人はいないらしい。
ただこのように、祭事に使われる一部の言葉だけが呪文のように残されている……そんな程度のものであるらしい。

次は『精霊達を集める踊り』だとヤハクに耳打ちされていたのだが、シャファンが出て来て驚いた。
最初の男に似た作りの白い飾りの衣装を着けて、同じく白い布で纏めた何かの葉の束を両方の手に握っている。手と足には鈴のついた飾りが嵌められ、動くたびにシャラシャラと澄んだ音が響いた。
日は既に暮れ、篝火の揺らぐ炎に照らし出された彼女は、店で踊っていた時よりも、遥かに厳かな雰囲気を漂わせている……ように見える。
思わず見とれてしまった僕の横で、微かに笑う声がした。もちろん彼女の弟だ。彼女がこの役である事をわざと黙っていたのだろう。
隣を見ると、とても分かり易い笑顔を見せた。
「余計な気を回すな」と、そう言いたかったのだが、口を開く前に男達の歌が始まり、遮られる格好になってしまった。

中央に目を戻すと、地に伏していたシャファンが顔を上げ、葉の束を勢いよく振り上げた。それにあわせて太鼓の音も鳴り始める。
最初の『鍵の踊り』は緩やかで単調なリズムだったが、今のこれは軽快なテンポでより複雑なリズムを刻んでいる。そして彼女は、まるで何者かに乗り移られでもしたかのように、うっとりとした表情で太鼓に合わせてしなやかに、また軽やかに炎の前を動き回る。
まるで彼女自身が人を惹きつけ惑わす精霊、あるいは妖魔ででもあ

るかのように、僕は彼女から目が離せない。
彼女が動くたびに葉がサヤサヤと鳴り、鈴もシャラリと涼しげな音を立てる。後ろに流した黒い髪は辺りの闇に溶け、そして衣装の白は、篝火の揺らぐ光を受けて絶えずその色を変えていく。
体にまで響く太鼓の音と、独特の節回しの男達の声。どこか現実感の無い、夢か幻のような空間と時間。その中心にいる彼女は最早神々しいとさえ言える。

……普段の良く分からない彼女とは、まるで別人のようだ。
ヤハクから聞かされた、シャファンの気持ちに困惑したままでいたけれど、今こうして彼女を見ていると、そんな事はまるでバカバカしい事のように思えてきた。
幻想的な時間は夢にも等しい。だったら今……この時間くらいは、ただ素直に感じたまま受け止めても良いんじゃないのかと。
目の前で踊る彼女はとても美しい。
……あぁ、まったくだ。
同時に、彼女に初めて会った時、叩かれたのは無理もない、とも。あの時も素晴らしいとは思っていた。だが、それと同時に変な色眼鏡で見ていた事は否めない。つまり僕は、こんなにも真剣な彼女を侮辱していたという事に他ならない。
彼女が怒るのは当然だな。
今ようやく合点がいって、申し訳無い気持ちで心が痛い。

それにしても本当に彼女から目が離せない。
この行動が示している事を考えると、苦笑いが浮かんでくる。
……これはひょっとしたら、僕の負けなんじゃないか？

神事である所の2つが終わると、後は『乱痴気騒ぎ』と表現しても差し支えの無い様相を呈した。いや、きちんとした規律のある最初

の2つの方が異質だったのだろう。
楽しげな太鼓のリズムに、やたら高く鳴る笛、歌のように、あるいは楽器のように自在に響く声、そして自由に踊り回る楽しげな人々。それを囲む人々は盛大に酒を楽しみ、入れ替わり立ち代り好きなように踊りの輪に加わる。この調子だと、最終的には酔っ払いしかいなくなるのではないのだろうか？

……しかしこれは人事ではない。
僕はパウじいに捕まり、隣に侍らされる格好になった。そして、彼が長であるという事実を大いに実感する事になる。
順番に挨拶に訪れる人々に、カップが空になる度に次の酒を注がれて限(きり)が無い。非常に困っているというのに、更にコテージの女将のミリアさんまでが加わり、がっちり両サイドを固められて逃げ道を封じられてしまった。彼女も何かしらの顔役であるものか、首に派手な飾りを下げている。
手にしたカップの中身は少し濁りのある甘口の酒で、花のような良い香りがする。そう強くは無いので、何となく飲めてしまうのが質が悪い。
食べる方に逃げようにも、卓に並ぶのは肴ばかりで、ここに来てすぐに行ったレストランの料理のように、味の濃いものばかりで辟易した。
頼みの綱のヤハクも、「もうここからは大人の時間さ、子供はそろそろお帰り」と、ミリアさんに追い払われて既にいない。

やがてそれらがひと段落してくると、今度はこの際だからと、酔いと好奇心に任せた二人から僕への質問がメインになった。そう、僕自身の事。僕が暮らす星の事、仕事に、日常に、ここに来た理由。何故そんなに興味を持たれるのかよく分からなかったのが、ここで僕は相当異質であるらしい。しかしそんな事を言われても、どうせ僕は僕でしかない。

しかし、先ほどまでの半分以上がよく分からない、この辺りの世間話に耳を傾けている方が何倍も気が楽だった。
……そして更に辟易する事に、質問は説教へと変化を遂げた。

「前々から思ってたんだがな、お前さんは、もうちっと楽しそうにしたらどうだ？」
さほど強くはない酒も、量が嵩めばもちろん酔いは回る。微妙に舌の回らなくなっているパウじいは、僕に対して無茶な事を言い出した。
「そうよねぇ。私もね、最初に見た時から、旅行に来てるのに何でこんなに生真面目なのかねぇって、不憫に思ってたのよ。」
ミリアさんまで勝手な事を言ってくれる。不憫って何ですか？　不憫って！？
「何言ってるんですか、僕は僕なりに楽しんでるんですよ？　ヤハクとジャングルを探索するのは楽しいですよ？　珍しい植物のデータを取って、知らない事を知り、それを元に考察する。ほら、楽しいじゃないですか？」
「……そりゃ、少数意見だね。ここじゃそんなお偉い事に夢中になる子はいないよ？」
彼女は軽く眉を寄せ、あっさりと言い捨てる。
「酷いですね。」
「酷いったって、奇特なんだからしょうがないだろう？　まぁ確かにヤハクはやたら詳しいけど、あの子は色々やんちゃもするからねぇ。あんたみたいに一辺倒じゃないよ？」
」
……一辺倒って。
ここに来て色々な事を経験して、自分でそう自覚もしたが、こうして直接面と向かって言われるのはかなり堪える。
「こっちだって、どうしてあなた方がこんなに構うのか分かりませんよ。酒のせいですか？　いや、そうじゃないですよね？　ここの

人達って、最初から馴れ馴れしくないですか？」
「ここじゃそんなもんさ。分からんから知りたい。それが当然だろう？　お前さんこそ酔っとるだろう？　今日はよく喋るじゃないか。」
パウじいはそう言って、人が悪い笑い方をしてくれる。
「プライバシーって言葉知ってますか？　何でもかんでもズケズケ訊けば良いってものじゃないんですよ？　それに、勝手に鍵開けられるようにするのは、やっぱりどうかしてるでしょう？」
「硬いねぇ、『夜這い』って文化知らないのかい？」
僕の正当な抗議に、彼女は妙な事を言い出して論点をずらす。文化？　それは文化なのか？？？
「そ、それは大昔の話でしょう？　それに、普通男女が逆ですよね？」
「不自由なこったねぇ、男だ女だって、どっちだっていいじゃないの。あんたの星は、どうせ人は人だとか、関心が無いとかで隣近所にどんな人が住んでるかも知らないんだろう？　あんたを見てるとそんな気がするよ。」
「だって仕方がないでしょう！？　本当に知らないんだから！！」
彼女の言った事は事実で、隣りに住む人なんか知らない。いや、感心もない。
完璧な防音の壁は、隣に暮らす人の気配など感じさせず、存在すら気にならない。
思わず叫んで、それに自分で驚いた僕は、自分を誤魔化すためにカップを一気に傾けた。不満？　不満なのか……たぶんそうなのだろう。ここに来て、これまでの生活との違いに色々と驚かされた。そして妙にその事が楽しかったのは本当だ。
空になったカップを置くと、すかさず長が直々に酒を注ぐ。
「機嫌の悪い顔をしとるなぁ？」
「そりゃぁ、あなた方が次から次へと酒を注ぐからですよ。」
「何を言う、フレッドが断らんからだ。まぁここじゃ酒を断るよう

な殊勝なやつはおらんがな。」
彼はそう言って豪快に笑い、更に続ける。
「人間酔っ払うと本音が出るだろう？　酒は憂いの玉箒（たまぼうき）ってな、これが酒宴の醍醐味さな。」
意外な事を言われて目を丸くした僕を、二人は遠慮も無く笑ってくれた。
知る訳が無い。今まで僕はこんなに酔っ払った事なんか無いんだ。
過ぎたるは猶及ばざるが如しって言葉を知らないのか？

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3076w/

---

サマーグリーンの夏

2011年10月11日12時59分発行